

求道

第九卷
第七號

大正元年十二月二十四日發行（毎月一回二十日發行）

求道第九卷第七號目次

求道

◎他力の眞義

講義

◎『教行信證』信卷三信釋

近角常觀

第二席 至心釋(人生問題)

雜錄

◎慶みて元良先生を悼す

近角常觀

告白

◎寛く大きい御思召

某婦人

◎信仰書翰三章

一 二 三

原田三郎
菅野久子
柳川こふく

講話

◎如來は常住にして變易有ること無し

(明治天皇御送葬講話)

近角常觀

時報

◎隨處隨緣

毎日曜午前九時

求道學舍

(本郷區森川町一帯地)

毎土曜午後二時

第二求道會

(九段坂佛教俱樂部)

毎月二日午後七時

第三求道會

(日本橋區板町説教所)

求道

第九卷
第七號

他力の眞義

今世他力といふ文字ほど誤解されたるはない、世上俗間には自己に何等の定見を立てずして、他の成行に放任するを他力主義といふ。事固より用語の誤謬に過ぎずと雖、以て他力なる文字が甚しく相違せる概念を人に與ふるに至れるを思ふべし、又我等が宇宙自然の現象を初めとして吾人周囲の事物を他力と思へるものありと雖、是亦誤れるの甚しきものと謂つべし。此誤解は哲學的にも宗教的にも大に世に行はれつゝあるが如し、世人或は自力と他力とは相互立するものなりといへる如き、世上のものは絶對他力なりなどいへるは、皆此誤解より出でたるものなり、又他力といふを心中に一個の理想の佛を形作りて、之を標準として奮闘し、又佛を冥想して慰藉するを意味するものあり、是他力と名けらるゝ佛を仰ぐ點は前者よりは正しきに近しと雖、眞に他力に救はれたるに非ずして他力を假想したるものなり。されば眞の力を感ずること

なし、定散自力の心これなりされば他力中の自力と名づけらるゝ所以なり、眞宗の信者口に他力を叫びつゝ他力なりと假想しつゝ喜べるもの多し、よく自ら顧みざるべからず、然らば眞の他力とは如何、眞實他力の信心とは如何。親鸞聖人行卷に曰く、言他力者如來本願力也と、又歎異鈔には本願他力眞宗といひ、他力本願念佛宗といふ、如何にも莊重なる語氣、嚴かなる用語を繰返さるゝ所以のものは、たしかに之に應ずべき内容のあれば也、されど近代の他力を叫ぶもの甚だ軽くして、畢竟現在生活の儘を以て他力なりといひ、宇宙現象の儘を他力なりといふ、是畢竟他力なりと解するもの也、他力なりと想へるもの也、他力なりと押附けるもの也、然らば眞の他力とは如何、曰く如來の本願力是也、念佛是也、眞宗是也、然らば本願、念佛、眞宗の眞意義は如何、眞内容如何、其不可思議力如何、是特に襟を正しくし、耳を欽て聞かざるべからざる要點にして、且つ之を聞信するの一念、信樂開發して、廣大勝解者となり得る御力也。抑々本願力不思議といふは罪惡の衆生を攝受し、苦惱の群萌を救済し給ふの大慈大悲なり、我等餘りに如來の大慈に耳慣れたるが故に其不思議を不思議と信ぜざるなり、勿體なき

事なり、夫れ善なるものは救はれ、惡しきものは退けらるゝは常道なり、清らかなるものは攝せられ濁れるものは斥けらるゝは人情なり、しかるに選擇本願は特に愚痴無智のものを憐愍し、破戒無戒のもの、稱へ安からんが爲の名號也、超世殊勝の弘誓といふは三學六度の行の修し得ざるものを救済したまふこと、三世の諸佛に超へ、十方の薩埵に勝れたまへり、若し之を我等人生々活の上につきて言はゞ我等惡しきものに對て、其惡を知りしめして之を見捨てたまはざる大悲に遇はゞ如何、我等苦多きものに對して其苦を融かす迄我等を照したまふ大悲に遇はゞ如何、無碍光の利益より、威德廣大の信をえて、かならず煩惱の氷とけ、すなはち菩提の水となる、罪障功德の體となる、氷と水のごとくにて、こほりおほきに水多し、さほり多きに德多し、惡きを憐れみ、罪を捨てざる大悲大願は洵に不可思議と言はんか、難思議と言はんか、我等三毒五逆の輩もかくまでも悲憫したまふ大悲に遇ひ奉りてこそ眞心徹到し、圓融無碍の利益に遇ひ奉るなれ、是れ實に如來の本願力也、大悲のやるせなき親心也、是れ他力の眞義也、念佛成佛は眞宗の御力也、南無阿彌陀佛。

罪惡を見捨てざるの慈悲、是れ眞の他力なり、然るに動も

すれば、罪惡と慈悲と出違ひになれるやうに考へらるゝものあり、曰く、我等は罪惡なり、其罪惡のものに惠を與へたまふ是れ慈悲なりと、かくの如く我等の罪惡に加ふるに如來の慈悲を以てしたまふ、ますく御惠に對して申譯なし、是れ借金の義務を果たさるゝに猶借金を加ふるが如し、益々恐れ戰かざるを得ざるなり、是れ罪惡を見捨てざる慈悲に非ず、罪惡を顧みずして慈悲を加ふるなり、罪惡を憐むの慈悲に非ずして、罪惡に拘らずして慈悲を蒙らしむるなり、是れ慈悲が罪惡と行き違ひになれるなり、慈悲は單に恩惠にして罪惡を憐むの慈悲に非れば也、動もすれば病めるの人、出離の一大事につきて如來の慈悲をいたゞかずして、唯日常生活の恩惠を喜びつゝ猶安心し得ざるものあり、これ單に日常の生活の恩惠を感じて、如來の慈悲は煩惱具足火宅無常の我等を憐みたまふ慈悲たることを感ぜざれば也、金を貸すことの恩惠のみありて借金を憐みて之に救與したまふの恩惠を受けざれば也、如來の恩惠は罪惡を見捨てざるの御慈悲也、如來の救済は我等が罪惡を憐みたまふの御心也、我等はかくまでも我等の罪を憐みたまふ甚重の慈悲を感じて初めて其苦を救はるゝ也、かくまでも我等を了解したまふの慈悲に遇ひたまつり

て心を安んずべき也、かくまでも我等が罪惡のために大悲を煩はしたてまつれることを慚愧したてまつるべき也、されど若し、我等が罪を其儘にして、單に之に加ふるに恩惠を加へらるゝならば、我等は益々恩惠の深きに堪へざらんとすべし、これ罪惡を悲憫したまふ慈悲に非ずして、罪惡と出違ひになれる慈悲なれば也、かくて如何に他力を説き他力を聞くと雖、眞の他力の意味を味ふことあたはず、眞の他力といふは、佛願の生起本末は我等の罪業甚重たることを抑大悲の起る淵源にして、其罪業の甚重を見捨てざる御慈悲が、今日阿彌陀の自在神力たることを知りたるが眞の他力を知れる也、此他力を知りてこそ我等の罪業深重なるを重しとしたまはざる願力無窮を仰ぎたてまつるべき也、散亂放逸を見捨てたまはざる佛智不思議を信じたてまつるべき也、是れ他力救済の至極なり、罪惡と救済と出違ひとなること、單に恩惠の重きに堪へざらしむるのみならず、又罪惡に對して放任無責任の感を抱かしむるに至る、俗に罪はかまはぬといひ、其儘といひ、罪ありてもよいといふ、責任を煩惱といふ、何れも未だ我等が罪惡を悲憫したまふの慈悲に飽足せざるの貌也、如來は我等が罪ありてもよしと宜ふに非ず、罪惡の深きが爲に特に甚重の

大悲大願を起したまふ也、親は子の病ありてもよしといふに非ず、親は子の放蕩を恕するにはあらず、親は子の不具を辛抱するに非ず、子の不具なるが爲に特に悲憫したまふ也、子の放蕩の爲に深く心を惱したまふ也、子の病の爲に飽みて見捨てずして全快するまで治療したまふ也、如來は一切の爲に常に慈父母と作りたまへり、當に知るべし諸の衆生は皆是れ如來の子也、世尊大悲、衆の爲に苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著せられて、狂亂所爲多きが如し、かくまでも我等が爲に罪惡を見捨てず、我等が爲に心を惱まし、我等が爲に五劫の思惟を爲したまひ、我等が爲に永劫の修行を爲したまひ、我等が爲に正覺を成じたまひて、我を待ちかねたまふ御親心、これ他力なり、是れ願力也、是れ大悲悲力なり、大誓願力也、今日阿彌陀の自在神力也、光明攝取衆生力也、十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀となつてまつる、是他力也、是如來の力也、此力に乗じてこそ初めて心を安んじ、亦我等が罪業の深重を感ずる也、此力に乗じてこそ罪業深重の我等安々と救はるゝを得べき也、宜なる哉、龍樹菩薩が水道の乗船と譬へ、善導大師が無礙無慮乗彼願力と述べたまふこと、彌陀、觀音、大勢至、

大願のふねに乘じてぞ、生死のうみにうかみつゝ、有情をよはふてのせたまふ、生死大海の船筏也、罪障おもしとなげかざれ、かくまでも我等が罪を憐れみ見捨てたまはぬ御力也、此力に遇ひたてまつらば、何人か空しく過ぐるごとのあるべき、聞信の一念、速に功德大寶海を満足する也、破開滿願の徳是れ如來の我等が開を破りたまふ光明の徳也、我等が罪業の缺陷を満足せしめたまふ親心の力也、大悲の願船に乘じて、光明の廣海に浮びぬれば、至徳の風靜かに、衆禍の波轉ず、即ち無明の開を破り、速に無量光明土に到りて、大般涅槃を證し、普賢の徳に遵ふ也と、他力救済の風光實に不可稱不可説不可思議と謂つべし。

聖道門のひとはみな、自力の心をむねとして、他力不思議に入りぬれば、義なきを義とすと信知せり、實に他力の至極は義なきを義とし、様なきを様とす、如來の我等の罪業深重を見捨てずして悲憫したまふ御はからひにはからはれまつれば、我等のはからひなきなり、自然といふも如來の御力によりて自から然らしめたまふことなり、決して天地自然の意義に非ず、如來願力自然の御はからひなり、法爾といふも如來の法の徳の故にしからしめらるゝなり、決して眞如法爾の意

味に非ず、我等が罪を消し失はしめたまふ御徳の爾らしめたまふ也、水の下に落つるは引力の力也、烟の上に揚るは空氣の力也、菓の甘きは秋の力也、罪業深重地獄必定の我等、信の一念身心悦豫して横に五趣八難を超へて、現生十種の益を得るもの、是れ本願力の然らしむる所也、五劫思惟兆載永劫の大慈悲の力によれば也、大願業力自在神力に由れば也、横截五惡趣、惡趣自然閉、昇道無窮極、易往而無人、其國不逆遠、自然之所牽と、是願力自然也本願力の牽く所也、親心の然らしめたまふ也、彌陀大悲のはからひはせたまふなり、我等凡小の一點もはからひを要せず、聖人晩年の消息に常に宣はく、他力には義なきを義とすと知るべきなりと。南無阿彌陀佛。



講

義

教行信證信卷三信釋

(夏季求道會講話)

近角常觀

第三席

「至心釋」(人生問題)

初めに今日の處の御文を拜讀します。

又問。如字訓論主意以三爲一義、其理雖可然、爲愚惡衆生、阿彌陀如來已發三心願、云何思念也。答。佛意難測、雖然竊推斯心、一切群生海、自從無始已來、乃至今日今時至今時、穢惡汗染無清淨心、虛假諛僞無眞實心、是以如來悲憫一苦惱衆生海、於不可思議兆載永劫、行菩薩行時、三業所修一念一刹那無不清淨、無不眞心、如來以清淨眞心成就圓融無碍、不可思議不可稱不可說至德、以如來至心廻施諸有一切煩惱邪智群生海、則是彰利他眞心、

故疑蓋無雜斯至心則是至德尊號爲其體也

昨日の處は親鸞聖人、至心信樂欲生の三心の味ひを字訓を以てお示し下され、即ち字訓を以て三心一信なる事をお知らせ下されたのであります。即ち昨日の處は、阿彌陀佛至心信樂欲生の三心の願をお起し下されたのに、天親菩薩が夫れを一心と仰せられたは何ういふ譯か、とありて、阿彌陀佛は三心と誓ひ下されたのであるも、愚鈍の衆生は信心歡喜の一心に頂くのであると、頂き心地の上で叮嚀にお示し下されたのであります。で昨日も申す如く、茲は字訓の一字々々が、親鸞聖人深き考への上から書き下されたのであれば、私が昨日一應お話した以上に、もつと深く思召しのある事故、皆様にも之を字の講釋とせず、御銘々に頂き心地の上より、もつと深く頂いてほしい、と思ふ事であります。

二

處て今日は昨日の反對で、今度は問ひを逆にお起し下され、『又問ふ。字訓の如き論主の意、三を以て一と爲せる義、其の理然る可しと雖、愚惡の衆生の爲に阿彌陀如來已に三心の願を發したまへり。云何か思念せんや』

「成る程字訓で頂き心地を聴聞すれば、天親菩薩が三心を一心にして、愚鈍の凡夫は信じ喜ぶ信心の一つで頂くとの事は能く分つた。此の義は其の理、如何にも然らあらう。が爾らば一つ根本に逆上りて、佛の本願の上に立戻れば、抑々阿彌陀佛の本願には既に至心信樂欲生の三心とお誓ひ下されてあるて無いか。此の義は如何に思念せんや」である。天親菩薩が

一心の指示は、愚鈍の衆生の頂き心地をお知らせ下されて、頂く所は一心とは能く分つたが、同じく阿彌陀佛も、此の惡逆の爲に、態々三心の願をお發し下されたのである。此の義は如何に思念せんや」である。頂く方は信の一つで、あゝ難有やと頂くのであるが、して見れば其の根本の本願に、阿彌陀佛能々叮嚀に三心とお誓ひ下されてあるは、何ういふ譯か」と言ふのであります。茲の處、如何にも阿彌陀佛三心の願をお發し下された事を、親鸞聖人ながら眼に見る如く、「夫れが何ういふ譯か」と、直きく佛の思召しの程を擧げさせられて、『經』に曰くなど、仰せられて無い。甚だ凡俗なる事なれども、我々『論』には一心とあり、『經』には三心とあるは如何」などの心を起し易いのである。之では理窟である。茲は理窟で無く、書物の上の講釋で無い。天親菩薩が一心と仰せられたも、『註論』には

我一心とは天親菩薩自督の詞なり。云云。

と仰せられ、天親菩薩があなたのお頂きなされた所をお示し下されたのである。あなたが此の自分如き罪深き煩惱成就の者が唯一心に頂くのであると御示し下されたのである。『和讃』には

論主の一心ととけるをば、曇鸞大師のみことには、煩惱成就のわれらが、他力の信とのべたまふ。

我々は動もすると、御經に三心とある譯如何など、の理窟で、『阿彌陀佛三心』と宣ひし譯いかゞなど、成り易い。茲は文句の上の講釋に非ず、學問にあらず。際を立て、言ふと、「頂く方は一心と天親菩薩が示し下されたが、根本たる本願の方

に叮嚀に三心と仰せられしは如何」と先づ問ひを擧げさせられ、此の御尋ねにて、大悲の思召し如何として、之より直きく佛の思召しの程を知らせて下さるのであります。

三

其處で次に、

『答ふ。佛意惻り難し、然りと雖竊に斯の心を推するに……』

我々は何うも讀書の癖より、之を經文の講釋と思ふて仕舞ふと、空になりて佛のお意が頂かれぬ。先づ『佛意惻り難し』之より阿彌陀佛のお意を言つて下さるの故、大悲の佛は如何なる思召しかとの答へ故、親鸞聖人先づ佛意の非常に深く、我々の測られぬとをお知らせ下されて、「佛意の程は、斯う言へぬ」とお示し下されたのである。が「然りと雖竊に斯の心を推するに」——斯く佛意の程は我々あゝ斯う測られぬが、今此の親鸞が頂かせて貰うて居る自督の上より、竊に此の廣大の思召しの程を推察して、其の譯を言ふならば」と仰せられたのである。茲で我々何とも思はぬのでありますけれども、聖人佛の御代官として、直きく佛意の程をお知らせ下さるのであります。『御文』の中には

故聖人のおほせには、親鸞は弟子一人もたずとこそ、おほせられ候ひつれ。そのゆゑは、如來の教法を十方衆生にとききかしむるときは、如來の御代官をまうしつるばかりなり。云云。

如來の御代官として、佛の思召しを十方衆生に説き聞かしむ

ると仰せられたが、親鸞聖人御一代の御教化である。故に御一代の御教化、一つとして佛の思召しをお知らせ下さる外は無けれども、今は殊に此の『教行信證』は淨土眞宗の根本たる、而も最も肝腎なる『信卷』の、而も最重要なる三心釋の思召しをお知らせ下さる處故、殊に茲には「愚惡の衆生の爲に、阿彌陀如來三心の願を發したまへり、云何んが思念せんや」と迄仰せられて、さて「竊かに斯の心を推する」とお示し下されたは、實に今眞に阿彌陀佛の眞意を開いてお説き下さる、實に有難き所であります。て昨夏の求道會で拜讀した『信卷』序文の文に茲の處につき如何にも聖人の御自信の強きお言葉が現はれてある。

夫れ以れば、信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起し、眞心を開闢することは、大聖於哀の善巧從り顯彰せり。然るに末代の道俗近世の宗師、自性唯心に沈みて淨土の眞證を貶し、定散の自心に迷ひて、金剛の眞信に昏し。

斯く淨土往生の眞實信心を頂く者が少いと仰せられて、次に……爰に愚禿釋の親鸞、諸佛如來の眞説に信順して、論家釋家の宗義を披閱し、廣く三經の光澤を蒙つて、特に一心の華文を開く。且く疑問を呈して、遂に明證を出す。誠に佛恩の深重なるを念うて、人倫の弄言を耻ぢず。淨邦を忻ふ徒衆、穢域を厭ふ庶類、取捨を加ふと雖、毀謗を生ずること莫れ。

と仰せられたが、即ち之れてある。諸佛如來の眞説に信順して、論家釋家の宗義を披閱し云云——釋尊初め諸佛如來

の教へに信順し、天親曇鸞善導等の論家釋家により、廣く三經のお光りを受けて、特に一心の華文を開くと、言はれたが即ち之であります。殊に「諸佛如來の眞説に信順し」の一句は、一面非常に「すなほ」なる御言葉であるも、一面今言ふ如來の御代官と同じで、諸佛如來の眞説の儘を、親鸞の頂く儘に言ふといふ、實に強きお言葉である。故に今諸佛如來の御意の其の儘をお示し下さるのである。も一つ言ふと、阿彌陀佛三心の願をお發し下された其の思召しの其の儘を云ふと、お知らせ下されたのである。て「竊に斯の心を推するに」——三心の誓ひをお起し下された阿彌陀佛の御意の其の儘を推測して言ふに、てあります

四

處で私共熟々思ふに、親鸞聖人の此の御教化無くば、我々今日他力本願の旨趣を頂く事は出来ぬのであります。て一昨日來中村氏の今度の御往生が御縁となり、人生問題としては人生無常の事のみ申して居つたのであります。が、みな様も實際世間の人生問題の上より、安心し仕度いとの御考があらうと思ひます故、今日よりは其の方で話さうと思ふのであります。が夫れが皆様を主にして申すので無い。言ふ私が矢張り此の人生の苦より、慈悲を知らせて頂いたの故、自分の氣づかして貰ひし所を叮嚀に申し、是非皆様に聞いて頂かねばならぬのである。て此の後は、純粹に人生問題と申した方が適切なのであります。其の人生問題が結局は一昨日來申した生死問題故、實に此の慶びは私も中村氏の御不幸につけ、非常

なる御催促を受け、其の感じの有りのみを一昨日来話させて頂いて居たのである。今日よりは猶ほ之より進んで、私の頂いて居る所を充分聞いて頂き度いのであります。で段々と追ひ／＼に申しますが、斯く私が人生の苦痛より信仰を頂き、頂きた時は『教行信證』など、私はまだ充分に分らなないのである。其後十年前西洋より歸り、此の求道學舎を創め、『教行信證』を拜見するやうになり、自分の苦悶の經過が、如何にも此の『信卷』卷末の阿闍世王の事柄其の儘なることを知り、之れに實に私は驚いたのである。私の『御本書』に驚いたのは、此の阿闍世王の苦しみを書かれてある所が、自分の苦しみ其儘なるに驚いたのが、もとなつてあります。て夫れより段々拜讀して居るに、自分の頂かせて貰ひたる心持が、又此の三心釋に如何にも能く現はれて居る。て『御本書』を講本として話するは、此方では昨年来なものであります。此の三心釋の處は、講話の上では何邊御話して居るか分らぬ。又此の三心釋を講本として話した事は、地方では四國を初め度々致して居る。實に此の三心釋無くば、阿彌陀佛の至心信樂欲生の御眞意は、迎も頂く事は出来ぬのである。實に今斯く講本として茲を拜讀させて貰うにつけ、如何にも明に親鸞聖人が、此の五濁惡世惡世界の中に、此の大悲阿彌陀佛の御眞意を傳へる爲めに能く來生し給ひ、佛の本願をお宣べ下さる事が頂かれるのである。設し佛の本願ありと雖も、親鸞聖人の此の御教化無くば、五濁惡世の我等は頂く事出来ぬのに、茲は實にあらたかな上にもあらたかな處である。若し著しく言ふならば、實に親鸞聖人阿彌陀佛になり代はりて、佛意の趣きを

お示し下さる所と、頂かねばならぬのであります。

五

次に、
『一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時の時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心無く、虛假諂偽にして眞實の心無し。是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫して……斯の至心は則ち是れ至德の尊號を體と爲るなり。』さて之よりが、彌々至心釋である。殊に此の至心釋が三心釋の源故、一度び茲の源泉に突き當ると、渾々として一氣呵成に三心の流れが皆な出て來るといふ有難い處であります。さて私が之程に茲を喜ばせて貰ふのも、追ひ／＼に詳しく申し上げますが、先づ第一に、『一切の群生海無始よりこのかた乃至今日今時の時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心無く、虛假諂偽にして、眞實の心無し。』此の御文を拜するに、實にどうも一面、人生人間なるものに對する最後の宣告である。已に『一切の群生海』とある、實に思ひ切つた言葉である。即ち生きたし生けるもの、上は彌勒菩薩より、下は蠢々蠕動の類ひに至る迄である。無始よりこのかた、乃至今日今時の時に至るまで……殊に此の今日今時の一句が難有いのである。昨日や今日の事で無く、實に無始永劫の昔より、今日今時、今の時に至る迄である。現今今斯く互に喜ばせて貰うて居る此の時間に至る迄である。……穢惡汚染にして清淨の心無く、虛假諂偽にして眞實の心無し。穢れ、惡しき、よごれ、染みつきた者にて、一つとして綺

麗な心といふものは無く、うそ假り、へつらひ偽りの者にて本當の心といふものは一つも無いとのお示しであります。

處で茲で人生問題を言はぬと分からぬから申しますに、全體御同様に、自分を清淨眞實ならずと思ふて居ぬのである。「自分は能く考へてやつて居る、自分は誰にも惡しく仕て居らぬ、自分は人に親切にして居る、自分は之れでよい」と、皆な思つて居るのである。之れが實に間違ひなのであります。故に殊に今の「生きたし生ける者は、如何なる者も綺麗な心は微塵も無く、一切の者は眞實の心といふものは一つも無し」との御一句は實に著しき御教化にて、私が人生に突き當つたのが、之である。故に茲はどうしても人生問題と一緒に話さなければならぬ。兎に角之より私の苦しんだ道筋を話すことと致します。

六

定めて茲には色々の方がお出なるべく、今迄眞宗の説教をお聞きになつた方も、また聞かれぬ方もあらうと思ひます。お聞きになつた方も、お聞きにならぬ方も、今私の申す處を、能く氣をつけて聞いて頂き度いのである。先づお聞きにならぬ方は、今ある如く其れ程に我々が惡しく、夫れ程に清淨眞實の心の更に無いものとは思へぬ、我々だとして、惡ばかりも仕て居ぬやうに思へる」と思はるゝであらうと思はれる。殊に佛教中の他の教へ、殊に一切衆生悉有佛性など言ふことを聞いてお出でになる方は、「斯く我々が斯く迄絶對に頭の上らぬものとは思へぬ、茲には恰も我々が悪いことと地獄の底の

「焦げふすべ」の如くあれども、然うは我々には思へぬ」と思はるゝて有らうと思ひます。之れは私も、然う思はれる筈と思ふのである。處で又從來眞宗の説教を聞き慣れてお出での方は、初めより我々は五逆十惡と聞いて仕舞ふて居る故、慣れこになり、悪いと言はれて、成る程悪いとは思ふものゝ、其の思ふ氣持が「他力の法門では我々は皆な悪いと言ふのである」と、悪いと言はれても、斯ういふ風に慣れて聞いて仕舞つて居るのである。而して心に眞に悪いと思ふて居るかといふに居らぬ。確に法を聞き慣れて居る者の心には、日々の日暮して自分は矢張り善くして居ると思ふ心と、法を聞く時、悪いと思ふ心と、二通りある。而して法を聞く時、悪いと思ふとは、其の裏には「俺は大分之れて分つた、大分之て悪いと分つた」と、はや分つたが、いつの間にか「てがら」になり、本當に悪いと思ふて居やせぬ。こんな事申すと甚だ幼稚な話のやうでありますけれども、斯く言ふもとはと言ふと、私自身が久しき間然うだつたのである。長い間口で悪い／＼と言ひつゝ、實は悪い／＼と自分で遠慮して言つて居るのみにて、眞に悪いと思ふて居なかつたのである。て今親鸞聖人は何うして此のやうに悪いとお示し下されたのであるか。何うしても茲は人生問題の上から頂かねばならぬのである。

七

先づ第一に私の小供の時の思ひの儘を申し上げますに、私共日々法を聞かされて思ふに、ごく幼稚な考なのでありますけれども、「自分は佛を信ずる、佛は清淨眞實なる方である、故

に其の佛を信ずる心の下に、其の佛の意に順ひ、其の佛の意を服膺して、其の佛の思召し通りにする事」と私は思ふて居たのである。「佛は惡人を捨て給はぬ慈悲のみの方故、其の佛を信じ、慈悲を喜び、法義に心を懸くる者ならば、佛の如く清くなし、佛の如く正しく爲し、設へ自分に人が如何に惡しくしても、其の者を憎まず、すなほに日暮しするが、佛を信じた姿である、信者の日暮してある」と、私は斯く思ふて居たのである。此の種の考を持つて居る人が、世の中には随分と多いのである。殊に之れ迄他力を聞かず、道理や理窟をやつて居る人が、斯く聞けるのは勿論であるが、他力を聞かれた人にも、之れがあるのである。茲に能く皆さん氣をつけて頂きたい。之れは實に大事の所で、此の本願の文を頂くにしても、動もすると「至心信樂欲生の三心とあるのだから、我々が至心のまことにし、我々が信樂の信心を起すのである」と讀めるのである。或は普通の立場で本願の文を讀むと、我々がまことにするのであると讀む方が、寧ろ當り前かも知れぬ。確に一應本願の文を讀むと、然う讀める。又本願の文を讀まぬかて、一應考へると然う思はれる、否な思ふ位の段でなく、私など長い間斯く思ひ込んで居たのである。さうして夫れが實際に出来る積りて居たのである。斯くして「どんな事あつても人を不足に思ふてはならぬ、我慢せなければならぬ」と思ふて居たのであります。

八

そこで成る可く平易に申し上げますが、人生の中に凡ての問題

が有る。が中で最も手近く、最も人の苦む問題が、人と人との間の相對的關係であります。一家なら一家の内、親子なら親子の間、友人なら友人の間で、互ひ／＼の心の關係、之れが凡ての人の最も苦む問題である。今日日本の現代人の苦むは、一家の内社會の上で、皆な之れに苦しんで居るのである。其の苦しむ心は何うかといふに、何うかして人と人との心を具合よく調和し度いが、夫れが完全に出來ぬ爲めに、問題となり、苦しむと、なつて居るのである。て其の間を今言ふ如く、自分は佛の如く正しくし、善くせぬければならぬ、と言ふ考で初めはやつて居る。處が人間は誰だつて自分が間違つて居ると思はぬもの故、甲は甲で自分を正しいと思ひ、乙は乙で自分は正しいと思ふて居る、之で一家社會が皆なやつて居る、自分を正しいとするもの故、此の度びは「人が間違つて居る、向うが宜しく無い」と屹度なつて来る。夫れ故「充分に善くしなければならぬ」と言ひながら、いつの間にか段々人と合はなくなつて来る。合はなくなつて來、苦しくなつて来るもとは、「自分は正しくして居る、自分は人に親切に仕て居る」と思ふもの故、此の度びは人が其の親切を受けて呉れぬとなり、人が不足に思へるやうになつて來るのである。併し人が如何に自分に惡しくし、如何に隔て、設へ人が自分を敵視しても、自分よりは飽く迄善くして行けばよいのである、益々其の人を哀れんで行けばよいのである、と頻りに此の奮闘主義でやつて居る。處で此の我慢が中々折れず、容易に屈せられぬ。私は長い間之れでやつて居たのであります。勿論其の間に、之れは自分が悪いと思はぬて無い。故に之を

直さんならぬ／＼と思ひつゝも、其の中に人と隔たつて來る、故に「人は隔てゝも、此方は隔てぬやうにすればよいのである、自分は彌々善く仕て行かんければならぬのである」とやつて居たのである。此の時に私に起つた問題として申せば、「人が色々宗教を誹難する。其の爲めには是非とも宗教を善く仕なければならぬ。其の爲めには自分は宗教の爲め、一身の利益など考へては居られぬ。夫れには何より大切な學問をも捨てなければならぬ。今迄は長い間一生懸命にやり、何とかとか造り遂げて來た學問なれども、斯うなると學問など考へては居られぬ。是非宗門の爲め萬事を放擲して、全身を入れねばならぬ。友人など夫れ程迄にも爲ぬやうなるも、人の事なんか何うでも善い、自分の爲る事は、自分さへ爲ればよいのである。」など、其上／＼と理想は何處迄も高まつて來る。も一つ／＼とすればする程、益々足らぬ處が見えて來る。故に彌々も一つ／＼と、心の中では何か自分が一つかど宗教の犠牲にでも成りた積りて、遂に頭も身も疲れ、もう彌々立てぬといふ所迄、やつたのであります。と申すは何か、意志の強い者は信仰に入り難く、弱い者が入り易いなど、申すのであるも、何れからでも信仰には入れるのである。要するに人間は、自分といふものを立場にしてやつて居る間は、刺激の大小、其の者の性分によつて、多少の遲速はあるが、遅かれ、早かれ、必ず一度は茲に突き當るのである。而して突き當る迄、之が分らぬのである。私など罪が深いといふ事は長い間合點で、而も之をやつて來たのである。其の間は口で罪が深いと言ひながらも、其の實然と思ふて居やせぬ。自分

九

は一つかど精神家だと人からも賞められ、形では頭を下げて居るも、心では下げて居やせぬ、却つて人を見下して居る。人間は皆な此の根性なのであります。斯くして彌々最後に押し當り、總ての事は皆な破壊し、自分は惱み苦み、再び立つ瀬無きに至り、遂に突き當つて仕舞つたのである。

さて其の突き當つた時の思ひは何うであるか、耻づかしけれど、皆な申して仕舞ひます。「自分は之れ程眞面目に事を造つたのである。全身を捧げ、誠心誠意造りて／＼遣り抜いた結局が、斯く自分は破滅に了つたのである。人生といふものは實に變なものである。考へると、世の人は皆な中位ひに事を爲し、決して眞面目に遣つて居りはせぬ。然るに自分は之れ程眞面目にやり、遂に身神の破滅迄に至つたのである。實に世は強い者勝ちである、勝手の者程勝てる世の中である。あゝ今迄之れに氣がつかなんだ」と。一旦斯う思ふたら、もう夫れが消えぬやうになつて仕舞うた。考へて見れば、之が決して此の時に人生に初まつたので無く、實は疾うから斯の通りの人生であつたのである。併し人生にまだ名譽などの旨ま味の附いてある間は、名利の爲めに遣つて行かゝるのであるが、彌々其の遣つた爲めに人にさげしめられ、名譽も何も無くなるに至つて、彌々今迄の本もので無かつた地金が現はれ來り、今迄は人に善くするなど、何を仕て居たのであるかと、なつて來たのである。元來が今迄が「自分が人の爲め宗門の爲め善く仕て居れば、人が之を認めるだらう」と、初めよ

り夫れとは無しに心にたくんで仕て居る事故、彌々一身の破滅となつて、「今迄仕て来た事は皆なうそ」と、茲に遂に突き當つて、何うにも斯うにも仕て見ようが無くなつて仕舞つたのである。て夫れ迄は私は、心に疑ひ隔ての心があつても、讀經、修養、精勵、有らぬ方法で其の心を取り去る手段は、遣れる丈けは自分では行つて居る積りて居つたのである。設ひ眞底それが出来て居らなくても、其の中へて、遣れる中は續けて、遂に突き當つて仕舞つたのであります。

處が妙なもので遣つて居る中は突き當らぬ、事の一段落着いた處で突き當る。斯く心の筋道だけ申した丈けでは、何うも分からぬ。具體的に言ふと、先年私共の宗門で、清澤師等が白河黨を起された時、私共客氣を持つて、其の一年前より、却つて私共の方より先生を促し、學校を止めて奔走して居た事、事實は唯是れ丈けなのである。何でも無い事なのであります。併し其の當時に於ては、私に取つては學校は第一の生命であつたのである。其の學校も投げ出し、又實際自分の生命位は差出す積りであつた處、事一段落着いて、まゝ幸に自分も死なずに事済んだ、さあ之れから東京に歸りて勉強と、彌々此方に歸つて来て忽ちくたばつたのであります。夫れは其の筈、一時學校を止めて居つたもの故、一方勉強は手に着かぬ。一方心の落ち着くと共に、今迄理想的にやつたと思ふて居た事が、夫れが出来て居なかつた事が分りて来る。又人が自分がやつた事を、もう少し理解して呉れようと思つたに、夫れ程迄に人は善く思ふて呉れぬ。元來が「結局は自分が仕た事を、人に認めてほしい、人はせぬのに自分はやつた」とい

ふ根性でやつて居たものだから遂に茲て行き詰つて仕舞つたのであります。

10

處で之が學生間の小問題故、小さい事のやうでありますけれども、茲は信仰の問題として大事の處で、信仰の問題には大小といふ事は無いのである。小は一身一家の問題より、大は政治家が社會問題の解決に苦心するも同じ事なのである。御婦人方が一家の中で、家内の振り合ひに苦まるゝも、又實際間の大問題にしても、信仰の味ひよりしては同じなのであります。て上來言ふ如くて、人は誰だつて初めから自分を悪いと思ふて居らぬ。私にしても自分を善いと思ふて居るもの故、段々人が善く無いとなつて来た。處で初めの中は辛棒して人に譲つて居つたのであるが、今いふ彌々の最後に於て「結局世の中は實に強い者勝ちである、自分如き弱者は、人の埋め草となつて仕舞ふばかりである」となつて来た。さゝ茲になると、今迄信じて居ると思ふて居つた佛も何んにもならぬ。佛の如くせんならぬと、如何程自分の心を策勵して見ても、もうどうしても起き上れぬ。すると、斯く一點疑ひが起つて来ると、夫れが凡ての問題に及んで来て、萬事が皆な夫れになつて来る。設へば茲に甲なる者に、一點隔て心が起つて来る。一寸思ふと、此方は甲に隔てゝ居る如きも、實に其の隔て心は自分の心にあるの故、夫れが乙にも丙にも皆な現はれて来る。私など初めは先づ人の調和せぬ問題に夫れが現はれて来た。友人間の心の折れ合はぬ事が、先づ氣になり

て、何うかして之を調和仕度いと、人の事はかり考へて、彼方にも此方にも色々言ふて居つた。すると何うも夫れが自分の思ふやうにゆかぬ。之は人が皆んな自分を思ひ思ふて居る爲めかも知れぬと、結局仕舞ひには自分が甲にも乙にも丙にも悪しくなつて仕舞ふて、自分が立ち行かなくなつて仕舞つたのである。之はをかしい、自分の從來理想とせる處は、どのやうに人が隔てゝも此方は隔てず、どのやうに人が悪しくしても、自分は善く仕て行くのが自分の信仰綱條の第一條であつたのに、夫れが一つも出来て居ぬと、そろ／＼分り出すと今迄「人を隔てぬのである、人を愛するのである、佛は惡人を助け給ふ慈悲故、惡人程善く思ふのである。」などと思ふてた事が、一つとして出来て居無い。寧ろそんな事思ふて居た丈け、夫れ丈け人を敵視して居た結果になつて来たのである。茲になると人間は寧ろ、信仰である理想である、などと言はぬ方が人が却つて淡泊で善い。早い話が私は關東方面、東京地方の人の淡泊なのは、實に感心する。信仰だとか、理想だとか言つて居る奴は、自分が理想家など、自分の理想を飾り、自分ばかり。えらがつてひねくれまはつて居るのである。殊に私は夫れが人より、一倍ひどかつた故、能く分る。今日の家庭上の問題なども皆な之れなのである。極言するに此頃は米價が高い。米價が高い爲めに飢え死にする人はまだ聞かぬも、米もあり置位もありて、家庭の折れ合ひがつかぬ爲めに死ぬ人は、毎日の新聞に二つづゝ位は屹度ある。高尚な事いふて居る者程、屹度突き當る。總ての人が皆な之れに突き當るのであります。

さて斯く私は初め、自分が善いと思ふて居るから、人が悪いとなつて来た。「人が悪い」として、自分は善くせなければならぬとやつて居た。處が今言ふ如く段々と行き詰つて来て、夫れが一つとして出来て居無い。然う思ふ丈け益々人を隔て、人を悪しく思ふばかりである。すると此の度びは「人が悪い」とて人を憎む自分も善く無い」となつて来た。すると「全體人が隔てるからとて、人を悪しく思ふ自分も悪い、全體隔てぬ人迄、此方より隔て、同情して呉れる人を此方より疑つて居るのである、之れは自分の心に、其の悪い隔て心があるからだ、こんな者を人が相手にせぬのも仕方が無い」となり、斯る順序で世の中は、自分も正しからず、人も同情して呉れず、人生凡てが暗みとなつたのが、私の苦しんだ道行きであります。そこで初めの本文に戻り、「一切の群生海、無始より以來、乃至今日の今時今の時に至るまで、穢惡汗染にして清淨の心無く、虛假諂偽にして眞實の心無し。」人生凡ての者が「まこと」有ること無いと仰せられたが茲である。自分もまことが無く、人にもまことが無く、私は實に此の原因より突き當つたのであります。最も人には夫れ／＼色々の場合がある可く、一樣では無いが、結局は此の人生の五分々々で、皆な行き詰るのである。理想的の信仰は皆な茲で仆れるのである。佛は惡人を救ふ慈悲故、惡人を憎まぬなど、佛を手本に仕てる信仰は、皆な茲で駄目になるのであります。處が他力を聞いてお出でになる方には少いかも知れぬも、世間の、基督教に限らず、佛教中でも他の教法を聞いて居らるゝ方には、佛を理想にして骨折つて居らるゝ人が随分多いので

ある。夫れで行けると思ふて居るゝ間は、いかぬ。突き當る時は、今迄理想的に仕ようと思ふてた丈け、よけ突き當るのである。て人生問題で一番困るは、此の五分々の隔てである。之に行き當ると、最早や佛も有難く無くなり、又今まで自分は犠牲的に働いて居たと思ふた之れも駄目となり、人も信頼出来ず、世の中が一步も動かれぬやうになるのである。

一一

さて斯うなると、初めは人を悪しく思ふてたのであるが、後には自分が五分々々であるとなる故、もう人の事などは言へぬ、自分の事であるとなる。すると「兎に角自分さへ善くすれば善い、自分さへ善くすれば、人も善くするのである」と分るも、もう夫れが出来ぬ。爲めに私は半年餘り苦しみて頭が上らなかつたのであります。處で斯く苦しむと、之を今の人はずい罪惡觀と言ひ度がる、之れが甚だ宜しく無い。うっかりすると、誰も此の誤りに陥入り易いのである。能く人は茲を罪惡觀と、罪惡を自覺したのだと言ふのであります。如何にも今迄の自分の本ものでなき、自分の罪惡の者である事は茲で分るのである。私なども此の時に初めて自分の眞に罪惡の者なる事は思つた。夫れ迄は心に煩惱などの起る事が有つても、唯悪いといふ位のもので、夫れが罪惡といふ恐る可き名のつく程のものとは思ふて居無つた。處が茲に至りて、一分一厘人に許せぬ此の心、實に徹徹底底罪惡の塊であると、初めて知つたのである。夫れ迄に罪惡とは、倫理的に面白く

無いと思ふ程の事を、理屈で著しく形容して、罪惡と稱して居つたのであつた。併しながら、茲になつても矢張りまだ其の罪惡を苦に仕て居る。あゝ實に罪惡の者である、困つたものだ」といふ丈けの事なのである。故に茲を罪惡觀と言ふてはならぬのである。「困つたものだ」といふ丈けではまだ自覺では無い。自覺の下に謝り果てた眞の安心とは言へぬのである。「こんなになつて實に困る、何とかせんならぬ」と矢張りまた罪惡を苦にして居るのである。故に之れではまだ機の深信にはなつて居らぬ。昔からよく間違ふのが茲である。蓮如上人の『御文』には「我身は悪しき徒ら者と思ひつめて」とある故、之が思ひつめたのだから、之が機の深信であるところがある。甚しきは之が機の深信故、機の深信は自力であると迄言ふ人が出来るのは、全く茲の取り違ひからであります。

一二

處て之は私が苦しんだやうに皆様を苦めよう、煩悶させようと思ふて、之を申ししたのは有りませぬ。前車の覆るは、實に後車の戒めて、私は之を信仰を求むる方法として御話仕たのては無い。私が遣りぞこなつた経験を皆様の前に懺悔して、人間は、凡て斯く駄目なものでもすぞと、いふ事を申したのである。故に皆さんは之をお聞き下されて「成る程して見れば人間といふ者は凡て其の通りである」と皆様の心に響きて分る處があれば、最早や言ふ事は無いのであります。併し茲に注意すべき事は、私がこんな事を話すると、今迄自分

は善く遣つて來たと思ふて居られる方が、俄にがたんと苦しみて、私が苦しんだと同様の苦しみに陥入られる方が多いのである。私は今迄に穩に聞きにお出で下されてある人に對し、悪い心をあばき立て、却つて苦めたと思ふ事がある。併し人が苦まれるからとて、苦しみのが人生としては眞實なのだから、強ち水がよく無いとも言へぬ。丁度危篤の病人には、危篤を知らせて早く治療させなければならぬと同じで、成る程自分には此の危篤の病氣があつたかと、如何に落膽し如何に苦しまれても、言ふ丈けの事は言はなくてはならぬ。併し唯徒らに苦しき思ひをさせる爲めに言ふても無く、又決して苦まねばならぬと申すのでも無い。言ふは、我々が斯る重き病氣持ち故、其の病氣に對し、其の苦しき心に對し、今茲に非常に有難き藥がある事を言ひ度い爲めに言ふのである。重き病氣持ちだといふは、其の病氣に對する妙藥があるから言ふの故、皆様に之を忘れぬやうに聞いて頂かねばならぬ。汝は恩知らずであると言ふは、其の爲めに泣いて居らるゝ親の御恩を知らず爲めに言ふの故、能く茲は注意して聞いて貰はねばならぬのであります。

一三

處が妙なもので、今迄信仰を開きつた人は、今のやうに悪いと言はれても「夫れは悪いが、其の悪い者を助け下さるゝ慈悲である」と自分の方より先き廻はりして遁けて仕舞ふて、折角聞いた所詮を無く仕て仕舞ひ、又今迄聞かぬ人は、悪い／＼と、夫れにはまつて出られぬやうになつて

仕舞ふ。聞いた人はまだ落ち込まず先きに、「お助け」と直ぐ浮いて仕舞ふて落ち心が無く、又聞かぬ人は如何にも自分は悪いと落ち込んで仕舞ふて、浮かべぬやうになつて仕舞ふのである。どつちかと言ふと、世間より言へば聞かぬ人の方が却つて眞面目なのであります。私などは聞き慣れて、長い間浮いて居つたのである。爾るに夫れがひどい苦しみに出遇つて、今度はどんと落ちて仕舞つた。今度は聞いた奴が落ちたの故、もうどうしても浮かばれぬ。俺はもう駄目だ、信心だなどとはもう言へぬ、俺は今迄に既に出来る丈け宗教的にやつて來たの故、もう駄目である」となり、夫れが信仰によりらくになり、お慈悲によりて出られるなどは、毛頭思ふて居無つた。夫れ迄にもう充分聞いて居りて居つたの故、もう他力では駄目である、禪でもやつて見たら」など思ふて居つたのであります。

一四

そこで甚だ通俗になりますも、私の思ふた通りに申します。私は最後に斯ういふ心を起した。「自分だとして何も好んで自分の物好きで、こんなに苦しんで居るのは無い。人の爲め宗教の爲めなど、思ふた結果がこんな有様になつて仕舞つたのである。そして人は此の有様を眺めて、誰も此の心を推察して呉るゝものは無い」と。して勿論自分は此の通り悪く仕舞が無いと思ふて居るの故、自分が善いものだとは、毫も思はぬ。故に人が自分に向ひて、善いとか感心だとか言つて呉れても、「夫れは眞平だ、人が今迄自分を然う思ふて居るの

は、自分が今迄然う見せかけて居るからぢや、人がだまされ
て居るからぢや」となる。故に人が「君心配することは無い、君
の事皆んなが善く思ふてる」と慰めて呉れても、「あの君はま
だ自分の心を知らぬからだ、あゝ畢竟自分は人を欺いて居る」
と、何んと言つて呉れても、駄目である。而して悪い根性の有
り切りを包まず人に言つて仕舞ひ度い。けれど夫れが何うし
ても言へぬ。言ふ丈けの元氣が無い、言ふと人が呆れて自分
を捨て、仕舞ふ」と、一方人に賞められてもいやぢやが、又一
方人に悪しくも言はれ度く無い。人から一寸でも「君は人を疑
つて居る」などと言はれると、「そら自分の生命と仕て置いた
信念ももう之で仕舞ひである」と歎く。斯くして悪い根性其の
儘打ち出して安心が出来ず、善く言はれても安心が出来ぬ。
「あゝもう仕やうが無い、あゝ自分だとして何も好んで此の苦
し味をするのでは無い。あゝ誰れが此の淺間しき自分の隔て
根性、此の根性を此の儘で能く理解しては呉れぬか。誰か能く
此の心を知り抜いた上で、成る程君夫れは苦しからう、成る
程心が隔たるだらう、實に無理は無い、可哀想である」と、能
く了解して呉れた上で、我は君が其の心を持つて決して悪し
くは思はぬぞと、言つて呉れる人は無い」と、——茲で聞
きどこなつて貰つては困るのである。人間は悪しくても善い
と人に言はれて、夫れで安心が出来るものでは無いのである。
成る程君は悪いと、悪いなら悪いと言はれた方がよい。併し、
「其の悪い、隔ての止まぬ君の心を見て、我は夫れが氣の毒で
仕やうが無いのである、故に君が悪しくても我は隔てぬぞ、
益々君を哀むぞ」と言つて呉る、人が欲しいのである。此時

私は人生に何が頼りであるか。名譽、財産、極端にいふと此
の苦しみの爲めに死に度い位に思ふてたの故、生命も入ら
ぬとなつて居たのである。故に此の世には一つも頼みになる
ものは無い。其の頼み無き身なれども、其の頼み無き此の虚
假不實の心中、此の罪業深重の胸の中を、飽迄能く知り抜き、
其の罪に迷へる汝が哀れてある、其の汝を捨てぬと言つて下
さる同情者があらばと私は思つたのである。して其の飽迄私
の此の根性を洞察して、見捨て給はぬ同情者が、實に大悲の
佛であつたと、とうとう茲で安神したのであります。處て斯く
言ふと皆様にはすぐ分るも、此の時私には之れが中々分らな
んだ。唯世間に計り其の人を求めて居たのである。其中に病氣
に罹り、外科の手術を受けて、病氣は快くなつても心はよく
ならぬ。遂に時節到來して、いつと際立ちては無けれども
此の慈悲を知らせて貰ふと共に、今迄長々苦にして居りし
私の悪心を、徹頭徹尾知り抜きて、「其の汝を捨てぬぞ、其の
者がよけ可哀想なのであるぞ、其の汝のまことならざるを見
抜きて、其の者が捨てられぬのであるぞ」と言つて下さる眞
實の友人が、實に佛にてましますと、初めて私の心に知らせ
て貰うたのであります。茲の處が實に肝腎である。今まで不
安なりしからつほの心中に、斯く一點それ程の慈悲と氣が
つくなり、今迄人を疑ひ隔て、居た心の中に、「こんな淺間し
き者を、能くも——夫れ程迄に見捨て給はぬ親様なりしか」
と、初めて向ふの御まこと此方に届きて、「今迄隔ての止ま
りしは、私が五分々々の奴であつたからである、其の隔ての
止まぬ奴が夫れ程に可哀想であると、其の上——と來て下さ

る慈悲なりしか。能くも——之れ程に淺間しき者を」と、向
ふの大悲を頂くなり「能令速満足功德大寶海」——あゝ有難
やと大満足して、南無阿彌陀佛々々と口に浮んで下された
のである、否實言ふと私など、南無阿彌陀佛々々と、口よ
り浮んで下さると言ふ程のいさぎよい御念佛が、出て下さる
程では無つた。却つて私の話をお聞き下さる方が、茲に氣づ
かれた時、いさぎよく喜び下さる様を拜して、私が驚かさ
るゝ位である。斯くして我々五分々々の人間、いつ迄經ちて
も夜の明ける事無き者の爲めに、其の者の爲め長々五分々々
の間に犠牲となり、此のまことを届けねばならぬ——と、長
々の念力の塊りが茲に頂け、慈悲を知らせて貰うたのであ
ります。

一五

さて斯く言ふと際立つも、私も一時に頂いたのでは有りま
せぬ。併し茲が實に大事で、私が悪いことしても、佛は助
けてあると聞いている中は、自分も悪いが、御助けに預る者
はまだ外にも在る聞き方で、遣る瀬無き御心の程が何うも美
しく頂かれぬ。夫れが其の悪い仕て見やうなき胸の中に「其
の者を」と佛より言はれた時、「實に此の仕て見やう無きこん
な者をかと」——前席で申した嫉妬山の話で申せば即ち親
を捨て、歸らうとする時、「歸りに道を間違へな」と親より一
言言はれた其の時である。其時に「こんな悪い事する私を、親
は捨て、下さらぬ位ひな事でなく、其の悪いこととするのが可
哀想であると、其の爲めに夫れ程迄に苦勞して下された御ま

ことであつたか。あゝ悪るかつた、申譯が無つた、有り難う
します」と、如何にも向ふの御まことの廣大な爲めに、如何
な最下の我々も、遂に敗けて仕舞ふのであります。譬へて言
へば、我々は人生問題の相撲を取つて居るのである。我々は
如何なるものにも敗けぬ極悪最下の奴なのである。然るに其
の奴が、其の根性が可哀想であるとの慈悲に喧嘩を買はれ、
「こんな悪い者をやうも——そんなに迄に」と敗けて仕舞ふて
「あゝ有難い」となるのである。すると今迄の人生問題がもう
問題にならなくなり、「あゝ廣大の慈悲有り難や、今日迄此
の淺間しき根性を持ち、其の爲めに長々佛を泣かせ奉つたの
であつたか、佛の五劫思惟の御苦勞も實に此の私一人が悪き
が爲め」と、大満足をさせて貰ふのである。すると人がどんな
事しよう、最早や人相手の人生ぢや無い。今迄人が隔てる
とか、人が何うかするとて、人を相手にし、人を問題に仕て
居たのが間違ひなのである。喩へば監獄の囚人が獄内にては
「彼奴が——と喧嘩ばかり仕て居るが、一度び出獄の時至り、
監獄を出て仕舞へば最早や夫れ切りである。我々が此の人生
に於て、互に五分々々の根性で罪の造り合ひばかりを仕て居
る、夫れを佛は哀れみ下され「一切の群生海無始より以來……
：虚假誑偽にして眞實の心無し。」——我々が「うそ」偽り」
で、其の罪の造り合ひばかり遣つて居るもの故、即ち次に『是
を以て』である。此の『是を以て』の一言、非常の「さ」であ
ります。佛の御本願が有り難いとは誰も言ふのであります。け
れども、此の御一言が無いと、茲全體が頂けぬ。何て佛は我々
を哀れみ本願をお起し下されたのであるか。我々が其の不清

淨不眞實で、罪の造り合ひばかり、遣つて居る者なるを以て、即ち『是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫して……』である。其の哀れなる様を御覽下されたるもの故……不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所終一念一刹那も清淨ならざること無く、眞心ならざること無しである。此の故に如來の本願は、實に大事件なのであります。處が前言ふ如く私など茲を理想的に讀みた爲め、我々は悪い、併し佛は清淨眞實である、故に我々も佛の如くせぬならぬ』となつた。露骨に言ふと、淨土門の教えても、氣がつかぬ中に斯うなつて人が多いのである。至心を我々が「まこと」にするのであるとすると、仕舞ひには私の前苦しんだと同じ道行さになつて仕舞うのである。我々は如何に清淨眞實にせんとするも、爲し能はざる「うそ」「偽り」の私なのである。其の「うそ」「偽り」の私が哀れてであると、即ち今の御文の「不可思議兆載永劫の御苦勞」が顯はれて來たのである。茲實に有り難き處であります。

一六

茲は御存知の如く法然聖人の『選擇集』の御教化では、阿彌陀佛の選擇御本願は何かといふに、我々には戒を持し徳を積み、六度の行を修すれば、佛になる事出來る道はあるも、衆生は戒を持つ事も、六度の行を修することも、座禪を行ずる事も出來ぬ——茲で眞宗の者は頭から、「戒定慧は自力である、之ではいかぬ」と初めから捨て、仕舞ふから、いかぬのであります。實は我々は之を仕て行くのが當り前なのである。

り實行して下されたが、即ち「不可思議兆載永劫の菩薩の行」であります。而して其の行を行じ下された時は、何うであるか。私共は一應二應は遣るも、三邊となれば辛棒が出來ぬのである。然るに佛は此の悪い奴の悪いのが可哀相である、何うかして飽迄——と『三業の所修』——あなた自身も、あなたも口も意である——一念一刹那も、清淨ならざること無く、眞心ならざること無し——實に此の廣大の阿彌陀佛の御まことなのである。處で茲を能く頂かぬと、佛の御苦勞の御恩の程が分らぬのである。其の斯くの如く、佛が長々身口意の三業を碎いて御苦勞下された所以のものは、實に夫れ程迄に、此の私が清淨不眞實なからなのである。私の清淨不眞實が無ければ、佛の清淨眞實は來て下さる事は無いのであります。世間でも眞實の出來るは、不實の者が有りて、其の不實の者を飽く迄——と、遂に其の不實の者をして、「濟みませぬでした」と言はせる迄、遣るが眞の眞實なるものである。其の如く、我々地獄の底に焦げつきの私の心を御覽下され、其の者を捨てぬ——の佛の眞實が現はれて、兆載永劫の御苦勞となつたのである。而して其の結果は、次に『如來清淨の眞心を以て、圓融無碍不可思議不可説の至徳を成就したまへり』——親鸞聖人も、茲に至りて言葉が詰まり、もう言ひやうが無いもの故、圓融無碍——「まこと」と「わけ」碍は無い、不可思議不可説の至徳と仰せられた。此の廣大の功徳を御成就下されたのである。而して之れが實に南無阿彌陀佛なのであります。次ぎには又『如來の至徳を以て、諸有の一切煩惱邪智の群生海に廻施したまへり』

之を仕て行くのが、本來佛教の教えなのである。處が我々が夫れが出來、夫れて助るなら、阿彌陀佛の本願は入らぬのである。我々が其の戒の守られざる、其の觀念の出來ざる事を佛は兼ねて知し召し下されたもの故、其の行の出來ざる、其の菩提心を起す能はぬ者がある、其の者をとの遣る瀬無き御心が、五劫思惟の御苦勞のもとなのである。阿彌陀佛の五劫思惟の御骨折りは、法藏菩薩が諸佛淨土の往生の行を一々御調べ下されて、其の戒の守れぬ、行の出來ぬ者を助け度い、との御心一つより外無いのであります。而して其の御苦勞の結果、南無阿彌陀佛は如何な行の出來ぬ、菩提心の發せぬものでも稱へられる念佛である。故に此の念佛を以て、其の行の出來ぬ者に、之を稱へさせてと選擇攝取して下された御念佛故、此の念佛は唯徒らに稱へる念佛では然い。此の凡ての行の出來ぬ此の者の爲めに、御廻向の御念佛と頂かせ貴ふ處が無くてはならぬのである。然るを茲の處で、他の事も有難いが、然ういふ廣大の御念佛故、此御念佛も有り難いとなると、私が先きに、戒行こそせぬ、人に善く仕度い——と勤めて居つたと同じになるのである。處が法然聖人がお知らせ下さるは、「其の一切の事出來ぬ其の者が可哀想故、其の出來ぬ者が頂かれるように、南無阿彌陀佛の六字を選択して下されたのである」と、お示し下されたのであります。

處で阿彌陀佛、斯く一切苦惱の衆生海を悲憫し下されて、夫れを捨て、下さらぬ願がありても、夫れ丈けては駄目である。其の御心を起し下された上は、其の心を御成就下さる處が無ければならぬのである。茲に於てか、其の誓ひの通

親鸞聖人は慈悲の廣大な事を示し下さるものも、い、又悪いことを示し下さるものも随分、い、一切煩惱邪智の群生海」と仰せられてある。其の悪い私の心中に、如來のおまことを廻施し、差し向けて下さると御知らせ下されたのであります。『則ち是れ利他の眞心を彰す』——利他といふは、即ち他力といふと同じである。自分より佛に向ふの故、他力であるが、今は佛より此方に向ふて下さるの故、利他である。其の佛の利他の御まこと心が、即ち至心である、至心は即ち此の廣大の佛の御まこと心を彰はして下されたのである、との御示してあります。『故に疑難すること無し』——斯くの如く廣大の御まこと故、疑ひといふものは、一厘も難つて居る事は無い。『斯の至心は則ち是れ至徳の尊號を其の體と爲る也』——此の如來の至心の御まこと心の體は、即ち南無阿彌陀佛の六字である。何れ程御まこと——と言ひても、其の御まことが空では頂けぬ。故に其の御まことの體は即ち南無阿彌陀佛。茲は私の前にいふ着物の喩えて言へば、親より下されたる手織の着物が、即ち親の御慈悲の體である。阿彌陀佛の御慈悲の體が、即ち南無阿彌陀佛の六字となるのであります。之れが叮嚀に申すと、第十七願に在るなれども、夫れは次第に話す事と致します。今日は主として人生問題より、お話したのであります。(夏季求道會講話、第三日第一席)

雜 錄

慶みて元良先生を悼す

大正元年十二月十三日東京帝國大學文科大學教授文學博士元良勇次郎先生長逝せられた、博士の如き眞摯熱實なる人格と篤學忠實なる學者を喪ふたことは、實に國家の損失學界の凶事たることは私が今更に繰返すにも及ばぬとあるが、私が個人として博士の指導を受けたる鴻恩は感謝せずには居られぬ、全體が私が此誌上に於て先生の遺稿と書くといふが稍變調の感がある、然れども此際に於て沈黙して過ぐることが出来ぬ心持がある、飾なく言へば先生は深く私を信じて居て下さつたと私は深く信じて居るのである、而して夫を先生の生前に面と向て感謝すべくあまりにはれがましうあつたのである、而して過去の今日獨りて沈黙して過ぐすべくあまりに濟まぬ様に思ふのである、併私が考へると同様に先生に對して考へつゝある人は少くあるまい、してみると、これは先生の人格の力である、愚痴を言へばモット色々話したかつた、承りたかつた、特に先生に對する言としては失禮たることを恕していたゞきて言へば、知己の恩を感謝したかつた、モ一ツ思ひ切り言へば、最後に死後信仰の問題につき一言聞きて貰ひたかつた、私としてはこれだけ言へば十分である、これは恐くば先生の恩遇に慣れたる眞高の言である、されど冥界に於

ける先生はかく言ふ不肖を領解して下さるであらう、今は、たゞありし事實の儘を同朋の前に告白して先生の靈に感謝したてまつる次第である。

回顧せし明治二十八年文科大學に入學して、先生の心理學を聴講したのである、一歩々々深く研究の歩を進められて徹底せねば止まぬといふ先生の講義につり込まれて知らず識らず、形而上學樂土に遊ぶ様に感じたのである、學說其物よりも研究態度に少からず魅せられたのである、内容其物よりも眞面目なる忠實なる虚偽なき講義振に深く感じたのである、たとへば質問によりては歸宅熟考の後翌日訂正されたこともあつた、今より考へると心理學其物よりも先生の心事によりて大に感化を蒙りたのである、私が入信後には特に此點に於て少からず道交を蒙りたのである。

明治二十九年の末清澤先生の改革運動の時京都に往き（此時外山先生は少からず同情して獎勵された）日夜身心努力の後三十年二月二十日歸東已後煩悶に陥りたとは懺悔録に告白の通りである。同九月初めて信仰に入り十月上京の後且つ喜び且つ勉め、悠々として勉強しつゝあつたのである、入信後眞面目に信仰を告白して深く了解して下さつたのが即ち元良先生である、一日私は先生を駒込淺草町の先生の宅に訪ねた、而して先づ率直に先生に尋ねた、先生は何故に基督教を脱せられたかと。先生は答へられた、予は十四歳迄儒教主義の教育を受け十五歳にして基督教に入りた、然るに基督教に於ては基督を以て神也と信ぜねばならぬ、是が教條である、しかるに自分は夫を信ずることが出来ぬ、されど基督教徒として夫

を信ぜぬのは虚偽である、故に色々として夫を信ずべく試みたが如何にしても信ずることは出来ぬ、而して之を人に勧めねば濟まぬといふ様になり、かくせねば良心の呵責に困らめられて居た、然るに洋行中段々考へて、良心の呵責と思ふとも何等の意味なきことといふことを悟り遂に斷念した、信ぜられぬものを信じやうと試みるが誤である、故に歸朝後斷然として教會を脱した、何んとなれば基督を神也と信ずることの出来ぬものが、基督教者と稱するものが虚偽である、故に教會を脱するに至つた、久しき間苦しみつゝあつたが教會を脱して初めて安らかになつた、然れども今に我家族は教會に屬して居るとの話であつた、私は少からず先生の眞面目の態度に心服した、而して私は恰も反對に從來の考が一變して、半年已上煩悶に陥りて速に信仰に入りたる經驗の始終を告白した、先生は頗る興味を感じられたらしい、そこで其席で先生が言はるゝには、此の如く信不信に拘はらず、内的實驗の結果を一點の修飾を施さず相語ることにしたらば、何れの見地よりも頗る面白きことである、此の如き會合を作りたらば如何であらう、私は基督教の經驗ある人を紹介すから、君は佛教の經驗のある人を紹介せられたらば如何との事であつた、私も大に喜びて早速其金をするに決した、而して別に會名を附するでもなければ、會員といふものもさまつてをらぬ、其時々々に臨時に沙汰をして集り會ふことにした、而して各自、信不信ともあからざる一點の飾りなく、心中を語ることの出来るやうに世上に公に發表せぬことにし、如何なる種類の經驗にてもありし儘を告白するに止めて、一切批評議論を

避くることとし、且つ各々其立脚地を異にするものなれば、其間に統一とか調和とか云ふ所謂經綸的の意味は全然なきこととして時々集會を催した、主としては先生の宅に御厄介になつた、此會は各自の信仰其物を尊重したるものにして、決して佛耶の間に共通點を見出さうとか、懇親を結ぶといふ様な意味は少しもなかつたのである、併之によりて相互に信仰上内的實驗を了解するに止めたのである、其當時行はれし佛耶兩教の懇話會とか、又今春の三教會同などは大に趣を異にする趣意である、彼等は兎に角何れかの點に於て共通調和を見出して協同事に當らんとする運動であるが、此會は全く各自其立場を異にすることを初めより認めて、毫も其間に於て交渉を見出さぬのである、唯少しも偏見を抱かずして他の所信を了解せんと試みたのであつた、宗教として其所信を守るといふことは其生命として止むを得ぬことである、之が爲に決して他を了解するに逼見を挟む様なことは毫もない、かくて此會はかなり久しく續であつた、清澤先生が東京へ來られし時、其會にて苦行時代の經驗を述べられて、全く失敗に終りましたと話されたことを記憶に存する。

其後監獄問題の起りたる時先生から何か話されたかと思ふ、たしか宗教所信の上より餘地なき問題たることを一言申したら直に了解された様に記憶する、其後引續きて教導講習院を東京に移轉して、淺草の後堂の狭くしい所に開院したる時、先生に心理學の教授を願ひたる所、快く承諾して下さつて、毎週土曜日に二時間づゝ講義をして頂た、實に不完全極る教導講習院が生氣勃勃たるものありしは全く先生や小河博

士や片山博士が助力によりて興へられたる賜である。講習院の東移と清澤先生の東上は、後年眞宗大學東移と東都に於ける信仰問題とに大關係ありしことを一言附記せねばならぬ。

引續き宗教法案問題のため、私の運動激しかりしため、政府よりの内意ありしか、果た大學での遠慮からかは知らねど、私を大學院より退學を命じようとの相談が開かれたらうじや、其時元良先生が近角ならば一言注意したれば快く自ら處決するであらうと辯じて下されたのであつたと、後に人から噂で聞いた、兎に角私が淺草別院に居りたるとき、眞岡湛海君が電話で唯今大學から注意があつたとのことをきくなり、其席より直に退學願を出してしまつた、後又噂にきけば私が大學に居たときも、必ず後にかくの如きことをするであらうといふことを人に語られた、といふことをも傳聞したことであつた、つまらなき私をかねてしろしめしてかくまで言ふて下さつたか、又かくまで蔭から庇護して下さつたことを御存命中は面と向てよく御禮も申せなんだ、況んや御恩報謝は一寸とも出来なかつた、南無阿彌陀佛。

私が洋行して歸朝後、度々御遇ひは申したれど機會は少なかつた、近年大學山上集會所にて宗教家教育家の談話會が開かれたとき、先生より促されて出席をしたことがあつた、近年洋行せられたとき私のベテッカーを使つて下さつたことがあつた、西片町と森川町空橋一つ隔て、兩家相望みてありながら、つい／＼かまけて度々伺つて教を受けることをせなんだのは今となりて残念でたまらぬ、併時々伺ふて歸朝已後純信仰問頭に専注する様になつた精神や、入信者の信仰の實驗などを

申上げたことを記憶する、今年春三教會同問題の時の如きも、先生の意見と私の意見と全く同じ様であつたが、遂に直接伺ふとなかつてしまつた、必ず先生も同様に思召下さつたであらうと思ふ、特に最後に申譯なきとは先生の御病中に御見舞申さなかつたのである、御葬式の時福來君が門下生を代表して讀まれた悼詞に斷腸感泣した、門下生が陰に陽に病床を護りて、平癒を踴躍されたときいたときは實に忘恩漢は我事也と懺悔した、直接面接を願へぬから、多少よろしき時になど、姑息な考をもつて間に遂に長逝された、十三日朝前橋より歸る汽車中新聞紙上訃音を知り實に残念に堪へられなんだ、特に、從來先生の立場はよく了解は爲て居るが、御病氣になられてからの信仰につき一度御遇ひ申したかつた、併平生からよく御了解を頂き居るのであるから、生死巖頭に立たれたときは必ず光を認められたであらうと信じます、何れにせよ今生の因縁によりて未來必ず御目にかゝることを樂む次第である、南無阿彌陀佛。此文を草するの半にして遇然にも初めて先生を訪問したる時の記録を見出した、實に明治三十九年十二月二十三日也、頭を同らせは恰も滿十五年也、今日に於て先生を悼むの文を草せんとは夢にだも想はざりしことである、冥界に在ます先生は一點修飾せざる此告白に對して、必ず首肯嘉納したまふことを信じ奉る、仰き願くは遐に照鑑を垂れたまへ、南無阿彌陀佛。

大正元年十二月十九日夜

近角 常 觀

告白

寛く大きい御思召

某 婦 人

近角先生の御熱心なるお導きにより、其日々々を有り難く暮らして頂く様になりました事を、是非書いて見よとの仰せによりまして、拙き筆ながら思ひきつて申上げることゝなりました。

儲私は幼少の時より極めて陰氣な性質でございましたが、どう云ふわけかだん／＼長ずるに従ひまして、まあ避み根性とても申すのでせうか、私は何も悪い事をしないのに、何故あの人は可愛がつて呉れないでせうとか、何か自分の事でも云はれたりし様のものなら、其人を大變恨んだり、悪んで見たりいたしました、誰一人私にやさしくして呉れる者もないのかと、獨り淋しく時折あはれな歌などを唱して、泣き入つた事は幾度も御座いました。それでも別に悪い事とも氣づきませんでした、其後縁付きましてからも、暫くの間は同じ様な有様で、やゝもすると人様の云はれる事を妙に惡意にとつたり、邪推し勝ちで仕方がありませんでした。主人から注意される事もございましたし、又少しは年も行つたからでも御さいませうが、自らもあれこれは悪い事だ、悪い根性だ、いつとなしに氣がついて來ましたので、どうかして善い心になりた

い、靜かに清い心になりたいと存じ、いろ／＼工夫もし爲めになる様な本なども讀んで見ましたが、いくら善い事と一時は思ひましても、二日か三日も経てば、忘れてしまひ、矢張直す事は出来ませんでした。先づそんな有様で、致し方なしにもがいてばかり暮らして居りましたが、恰度今から三年許り前でした。里の母が大變佛道に興味を持ち、だん／＼やつて行く間に、それは／＼結構な事だと仰せられまして、私の主人にもそれを勧められ、主人も其道に入る事となりましたので、随つて私も其々御説教を同ひに上た事もございましたが、どう云ふわけか、當時は人様が有り難い／＼と感ぜらるゝ程、夫れ程に私は有り難いとは感じませんでした。とかくする中に、母の持病が瘤といふ病だといふ事がわかり、母自分も不治の病と存じて居りましたが、もとより勝氣なんてございまして、たから、いよ／＼もう駄目だと思つたでせうか、或日の事ひよつくり暇乞旁々、私宅へ來られましたので、主人も私も大變驚き、慰むるばかりで、何とも申上ぐる事も出来ず、只々お氣の毒な事と存じ、お歸りの時など何とも云はれない、又とない淋しい心地で、遠く／＼姿の見ゆる限りお見送り申しまして、まだ涙乾かない其翌日でしたが、主人も亦ふと病にかかり、だん／＼重りに重つて、床についてからたつた十日ばかりで、とう／＼此世を去られましてしたのでございます。老小不常とか伺つて居りましたが、この位悲しく、痛く切ない事が世に御さいませうか、私は此時位無常を感じた事は、又とございませんでした。

嗚呼、夢々、夢でないかと、幾度か疑ひ、幾度か訝り、我

と我が手をつねつて見た事も御座いました位で、世の中はかくも無常なものかと、身に泌々と其當座は毎日々々、泣いてばかり居りました。それから少し過ぎて、母もとうとう亡くなりましたが、只母や主人ばかりでなく、兄弟も姉妹も、又子供等迄も、自分を捨て去らん様な心持がいたしまして、地獄の底へてもつき墜されさうに心細く、どうしたらよい様になる事か、誰か私の心を察して下さる人はいないでせうか、救つて呉れる方はないでせうかと、思案のあまり、淺草の觀音様へ御繩がりしやうと決心し、朝まだきより電車さへ通はざる静まり返つた街路を、ひた走りに日参する事となりました。されど強くかき亂だされたる心の荒みは、とても癒やす事は出来ませんでした。そこでせめて近角さんへても上つて御法話でも伺つたら、どうにか心も落ち附くだらうと思ひ、其時より初めて有りがたい御話を聞く事になりましたのです。初めの中は結構な御話と伺ひましても、又疑つて見たりなんかいたしまして、今から考へると勿體ない事です、半信半疑の中に幾月か暮らしました。處が此夏のことでございました。いつもの通りの御法話中、姥捨山の御話を伺つた時、あゝ、佛の慈悲の寛く大きい御事は、こんなにして見様のない者でも決して捨て給はず、廣い御思召にいらせらるゝ事を氣づかせて頂きましたと同時に、一時に胸がはれた様に思はれまして、苦痛懊惱もかき消された様に、喜びにみちみちて、大變樂になりました、其日々々は御慈悲のもとに暮らさして頂くことの有りがたく、御佛さまへ御禮を申上て居ります。それにしても、私をこゝ迄導いて呉れましたは、皆亡き夫

が死後に迄もこの不束なる者をあはれみでの賜と存じて居ります。もし亡き人がかゝる導きをなし下さらなかつたら、私は最初申上げました苦痛を持つて、罪を世に残しつつ、二十年も三十年も、或は生涯を不幸に過ごした事と存じまして、只ひたすら佛前に御禮を申しつゝ暮し居ります次第で御致します。

佛敎辭林

故 藤井宣正師著
南條文雄師校
島地大等師補

藤井宣正師が明治佛敎界の先覺者にして、又思入たる事は言ふ迄も無い。其の高邁なる識見、温雅なる風貌、吾人は斯く書きつゝも、追憶の情堪え難きものがある。殊に師が東西の諸途印度に渡り、佛蹟探險の途中にありて、不幸病歿せられたる一事は、今猶ほ忘れんとして忘るゝ能はざる處である。師が生前佛敎復興中なりしは聞いて居つたが、今斯く公にさるゝに及び、さながら故人に再會したる如き感がある。抑々師が本辭典編纂を思ひ立たしは、明治三十年頃の由にて、爾來刻苦精勵、諸歐諸印の間も樂を廢せず、漸く大成に及んで、不幸異域に往かれたるものである。然れば實に師が晩年の心血を注がれたるは、本辭典編纂の業と謂つ可きなのである。而して其後師が令弟大等師、師の遺誌中より本書完成の事を遺囑しあるを發見し、慨然遺志を繼承し、前後十年の日子を経て、漸く今日上梓の運びに至つたのである。然れば本書の編纂が如何に眞面目なる立場より發企せられ、如何に苦心の費されたる完璧のものであるかは、今更内容を説明する迄も無き事である。實に佛敎界近頃の出版物として、佛敎に志ある家庭、人士に推薦する次第である。

發行所、神田明治書院、詳細は本號廣告あり。

信仰書翰三章

一

拜啓、昨夜は御多忙中御無理を御願申し上げまして、誠に恐縮の至りて御座います。何卒御宥し下され度う存じます。諸て又愚生に告白を書き出せとの御命令下され、私は何となく喜ばしき様な、又勿體なくも思はれまして、御遠慮申上ましたれども、又厚かましくも心の丈を書かして載きます事は、實に私として身に餘りました幸せ者と存じまして、書けもせぬ事に筆を取りまして申上ります。

今年の夏七月に私は肺炎加答兒で歸國して、九月に故郷を出て上京致しますと、又も悪しくなりまして、北里博士の御診察を御願申しました所、兎に角今の内注射療養をしたならば全治の見込があると申されました。而しながら自分は肺病と云ふので非常に落膽致しました。役所の方は出勤を止められましてしまひまして、妻や子供は里へ御願申して、自分一人下宿の一案を我世界と致しまして、越し行く先きを考へては過ぎ来りました過去を思ひまして、噫々實に私は親へ對しまして何一つとして孝もせず、妻へ對しまして今迄は不足を申して居りましたのが、今となつては夫として何等の義務もせず、親よりして受けた體を粗末にしたばかりに此の如き不始末を來したのである、何としても此の罪の深きもの、如何とも安心が出来ず、又死して如何ななどと内心非常に不安に不堪、過日先生に右の事情を訴へ申した所、懇々御説き下されまして、「佛

様は兼て其方の心の中を御存じあつて其苦しみつゝある者が不憫である。親へ孝行も出来ず、人に不足ばかり云ふて居る其根性が可愛想である、其者のために五劫の間の御思案、永劫の御修行下されて、お前のためにやるせなく思つて下さる親様があるではないか」と聞されまして私は今迄困るゝと申上げて居りましたが、如來様の方では先きに私の心の底迄も知り貫いて下されましてしたのであつたか、自分はこの様な心故に佛様を苦しめて居りましたかと、知らせて載きまして、只々御冥見に打あかさされました御呼聲をたよりと致しまして、何も案じる事はない、佛様に御従ひ申しまして、かくも罪の深き私を御見捨の無き大悲の親様が力になり、御念佛を稱へさして載きましては喜んで生活して頂いて居ります。以來病氣も漸々宜しく、偏に先生の善知識の御化導に依り、心の病が治りしものと存じます。

兎に角此度病氣に依り、得難き佛法の信心を得さして載き、未來は生死をはなれさして頂きまして、何とした私は仕合者でありませうと存じます。先生は御壯健故に私は先へ行くやも知れず、兎に角にも未來御目に掛り、御禮申し上げませう。先は甚だ勝手の手のみ申上まして、失禮の段御許し下され度。末筆ながら皆々様へ宜しく御傳言願上ります。東京に居らるゝ皆様は先生の講話を聞かれて仕合てあります、小生はうらやましく思ひます。本月の求道が来るのをたのしみにして居ります。草津の御消息が早く承り度いと存じます。頓首、

十二月九日

原田三郎

二

つたなき筆をもちへり見ず、うれしさのあまりをこがまし
うも書きつらね候。

先生様にはいつも御機嫌うるはしゆう居らせられ候御事目
出度存じ参らせ候。

ふしぎの御縁により昨年暮より求道を拜見致させもらひ候
處、追々御教しへをき、参らせ居る中、ふとしたる出来事にあ
ひ、此身のいとしき悪しき仕方になき者なる事に氣づかせ
て頂き、唯一無二の御本願の御いはれ御さかせに気づかり、
何ともかとも申さん様なき有り難き心地致されうれしく
存じ候。

之もひとへに先生の御親切なる御道引きによる事とふかく
御禮申上候と共に、御佛の御方便によりてこそと只々う
れしく有り難く存じ候。實に先生が御教への御親切なる、讀
み居る中思はず、「あ、よくもかくまで委しく」と、何ともい
ひ得ぬ氣持致され候。かく有り難き身に御ぞだてあづかりな
がら、我身を省れば毎日々々淺間しき日暮しのみ致し居り候
事、おはづかしき限りに候。もつたいなさのきはみに候。
何卒々々寒さの時節大切な御身、御風など召させられぬ
やう祈り上候。御縁もあらばいつか御拜姿をうする事となし
み居り候。

今日はしも御開山様の御命日、いよ／＼御恩のふかき事を
感ぜられ候。南無阿彌陀佛。

十一月二十八日

菅野久子

三

拜啓、其後は本意なくも御無音に打ち過ぎ平にゆるし被
遊度候。時分がら御高堂御一統様には何の御さほりもあらせ
られず、愈々御機嫌よく渡らせられ候御事と目出度存じ候。
愚も御蔭様にて温き慈光の下、ほそぼそながら日暮しさせ戴
き候。

さても過ぎつる頃には來堂いたし、種々御厄介に相成恐入
候。實に御一同様の御親切申上ぐるも勿體なく、日頃思ひ浮
べてはお懐かしき限りなく候、尙毎に御心盡しの御本御恵み
に預り有難く存じ候。いつも御やるせなき御思召を頂戴する
度に、先生に御目にかゝる思ひ致し候て嬉しく拜聴仕候。願ふ
らくは今一度御慈顔を拜し、ゆるゆる御禮申上げ、かつは温
き御育てに遇ひ奉り度存じ候。あけくれに東の空のみ懐かし
く御慕ひ申しながら、つひ御たよりも申上ず、無筆の罪と幾
重にも御ゆるしの程御願ひ申上候。

さりながら、かく哀れなる罪の子も、御親の限りなき御慈
悲に救ひ上られ、今は心にかゝる事もなく、地獄行のまゝな
がら心のどかに日暮しさせて載く事のうれしさ、身は只「恩」
の一字より外なく候、南無阿彌陀佛、々々々々々々。是れ偏
に先生の御賜と感謝に堪へず候。宜しく意中を申述べ、厚く
御禮申上度存じ候へ共、御承知の愚か者、失禮ながらあつ
しの程御願ひ申上候。誠に申兼ね候へ共、何卒々々奥様へも
よろしく御傳言下され度伏て御願ひ申上候。末筆ながら時分
柄御一同様随分お厭ひ遊ばしい／＼御無事の程念じ入候。
先は嬉しさの餘り愚筆をも願ず御禮申上候。勿々。

十二月七日

柳川こふく

講

話

如來は常住にして變易有 ること無し

「明治天皇御奉葬講話」

近角 常 觀

只今は佛間に於て、明治天皇の尊儀に對し奉り、嚴そかに
七七日の勤行をさせて頂き、又一昨日は青山に於て、又昨日
は桃山に於て、御葬儀のありたる、御遺靈に對し奉り、御同
様誠を捧げ赤心を盡して、拜禮し奉る事であります。一昨日
來は皆様も、此の思ひ懸け無き、御大葬に遇ひ、其の御行列
をば拜しなされて、無限の感慨を以て胸中御哀悼の念にて充
たされ給ひた事と思ひます。私も御同様路傍に於て、御葬列
を拜し、實に無量の感を抱いた事である。御崩御以來今日迄
凡そ一ヶ月半、つまり七七日の今日に至る迄で、之と代りた
る事も致さず、却つて地方傳道を休み不法懈怠申譯無き日暮
し致しながら、毎日佛前にて御禮をする度びに、實に廣大の
御高恩を報謝させて頂き、斯くて御中陰中を過させて貰ひ、彌
々の最後に於て斯く世界中の國々より、御名代を遣はされた
る、實に前古無比の尊き御大葬に遇ひ奉り、實に長々の間我
々の爲め、御心を悩ませしめ奉りたる四十七年の御治世の終

り、最早や再び 龍顏を拜し奉れぬ事となり、人生より之を
申せば、殆んど言の出づる所を知らざる次第であります。殊
に畏れ多きことながら、宮中に於かせられては、如何にお淋
しく、如何に、御悲哀の涙にくれさせ給ふことと、夫れをば
我々々々としては、恐懼の極みながら、甚だ氣づかはれ恐察
し奉る事であります。近くは一昨夜内外を驚かしたる乃木大
將の殉死の如き、實に意外とも驚駭とも形容し難き出来事に
て、大將の如き武士道の方にては、殊に唯一 陛下に
事へ奉るを生命とせる純忠至誠の大將の心事よりすれば、斯
くの如き事の現はれ来るも、強ち推量の出来ぬ事では無いの
である。確に人生、臣下の悲哀の表現といふ點よりすれば、
大將は全國民に代はりて、此の至情を致し下されたものと思
はれ、此の點に於ては、又た申しやうの無い事であります。
『涅槃經』を拜讀すると、佛涅槃に入り給ふた時、五天竺の總
ての人間、階級の上下、人種の如何を問はず、如何なる者も
地に哭し、天に歎き悲んだといふ事が細に書かれてある。實
に此の世の悲しみより言ふと、此の度びは日本國中上下舉り
て、此の『涅槃經』の有様を面の當り拜したる事にて、恐らく
ば歴史上にても、此の度びの如く萬民の心魂をえぐり、悲哀
の涙に咽びたる事は、過去に於ても少く、將來に於ても多く
無き事と思はるゝのであります。

さて、かく／＼暮せる中に、御中陰もいつの間にか經つて仕
舞ひ、其の間我れながら實に相濟まぬ事であると、度々氣を
取り直させて貰うて居たのであります。振り反り見るに、

此の長の御中蔭中、天氣と共に心も曇り勝ちであつた。今から考へるに不知不識の間に、國民全體が悲哀の涙にくれて暮して居たと思ふのであります。去りながら陛下の御尊體が猶ほ宮中に御座しますと、下々と雖も思つて居る間は、何んとやらん悲みの中にも、心の賑やかな處があつた。今は彌々御陵のあなたにお出でかと思ふと、今更振り反り一段の淋しさを覺ゆるのであります。乃木大將の今日に於て此の事ある、恐らく又此の邊から、自然の結果かとも、推察さるゝのであります。斯く御同様に人生より言ふと、今度程明に人生の無常を見せて頂き、今度程明に人生のそらごとたわごとを知らせて頂いた事は少いと思ひます故、此のお心深き御示しを輕ろく頂かぬやうに、氣をつけ度いと思ふ事でありませう。

三

定めて皆様も種々にお感じの多い事と思ひますが、私の殊に感ぜさせて頂いた事は、一つは此の明治天皇陛下の御治世中に於ける我が日本の非常なる變化といふ事でありませう。之は前にも言ふ事でありませう、殊に感じましたのは、先達て或る慈善の業に従事して居らるゝ方が、此の度びの御葬儀につき、三日間休みとなり、下々の人が困るから此等の人に何か施しを仕度い、夫れには恩賜濟生會に治療に来る人の爲めに、少しばかりの食餌を頒ち度い、夫れには一緒に精神的の事を知らせ度い、との御考より私に其の書き物を頼まれた。私も「誠に結構な事である、藥を飲むには食餌が入り、食餌を得れば精神上の滋養が入る」と思ひ、陛下の御宏恩の事から、段々と書かせて頂いた。《本年第五號所載》其時筆を執り、

殊に思つた事は、常に言ふ明治初年の御詔書を拜讀すると、朕幼弱を以て大統を繼ぎ、爾來何を以て萬國に對立し、列祖に事へ奉らんやと、朝夕恐懼に堪へざる也。(中略)今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其處を得ざる時は皆な朕が罪なれば、今日の事朕自から身骨を勞し、心志を苦しめ、艱難の先に立ち、古へ列祖の盡させ給ひし蹤を履み、治績を勤めてこそ、始て天職を奉じて億兆の君たるに背かざるべし。

と、明治初年國歩艱難の時に當り、此の折柄如何にして海内を治め、外萬國に對立して、日本の面目を保たんやとの遺る瀬無き御心の中が現はれてある。然るに四十七年後の今日は、斯く一度陛下御登遐の事が傳はるなり、中外震動し、獨逸よりはハインリッヒ親王を遣はされ、英國よりはコンノート殿下お出でになり、其他諸大國より夫れ「諸大官が參列せられ、殊に英國よりは儀杖兵が出る」といふ町重を極めた事にて、我々明治の聖代に生れ、何とも思はぬのでありますけれども、之を御踐祚の當時と、斯く今日萬國の禮節の調ふたる有様とを比較するに、隔世の感と言はんか。又領土のふえてる上よりは申す迄も無いのであります。殊に此の四方より、態々各國使節の參列せらるゝ様を拜し、如何にも陛下の御稜威の著しきを感じ、之は唯事て無い、實に陛下の國民を思召し下されし大御心が四十餘年の間に、人生の上に實現した事と頂くのであります。之は世間の上より、陛下長々の御苦勞の御恩、御稜威の著しきことを、仰がせて頂いたのであります。

四

さて一つは宗教的の方面であります。人生より考へると、之れ程の尊き至尊の御身の上にして、人生としては一分一厘の不足無く、出来るならば我人と共に聖壽萬々歳と祈り、又此の度び御重恩の事ありても、國民舉りて御平癒を天地に哀願し、此の度びの如き事有らんとは、夢更思ふて居なかつた。實に我々下々としては此の度びの事程不意を打たれた事は無いのであります。是れ實に人生の無常である。此のことに於ては、實に著しき御示してある事を頂かねばならぬと、思ふのであります。殊に今言ふ濟生會に治病の爲め来る人に對し、精神上より安心して恩賜の藥が頂かれるやう、精神上の安慰を與へる書き物を致しましたの故、殊に思はせて頂いた事は、斯く陛下は下々の病ひの直らぬ事を哀れみ思召し、下々の治療や藥の事迄、心配下されてある。して濟生會に来る人々は、其のお藥を頂き本復する今の時に、陛下御自身は遂に名醫の力も靈藥の効果も致し方無きといふは、能くも此の人生の有らぬる金銀財寶の力を以てしても、遂に此の人生の致し方無き「そらごとたわごと」の有様を、お知らせ蒙つたものである、と思はせて頂く事でありませう。されば信仰上より申せば、今更の事ならぬども、先きに申した佛入涅槃の時に、平日佛の教へを聴聞して居られた人達ちが、胸を打ち身を地に投げつけて、悲涙號泣せられた。其の時に此等の人々を前に措き、佛涅槃に入り給はんとして、最後の御說法は何であつたか。こは常に『涅槃經』を話す度び毎に言ひ、又私共、父や子供を亡くした度びに、いつも知らせ

て貰うて居る事ながら、今斯く國民全體が悲哀に沈む時に當り、殊に著しく言へば、乃木大將の「最早や生きてる甲斐が無い」といふ其の心根に向つて、彌々頂かせて貰はねばならぬは、實に之であるといふ事を申し度いのであります。

五

度び「言ふ涅槃經」の說法なれども、佛涅槃に臨み、阿難に向ひ、法を説きて仰せらるゝには、諸行は無常なり、是れ生滅の法也。生滅滅し畢りて、寂滅を樂と爲す。

人生は如何なるものでも、諸行は無常である。是れ生滅の法である。こゝ聞きやうでは甚だ冷かに聞えるのであります。冷かに聞いてはならぬのである。佛弟子が佛の入滅を哀慕して、大地に泣き叫ばれる夫れに對しての御示しなのであります。「豫て汝等に説き置いた如く、諸行は無常である、是れ生滅の法である、人生は當てにならぬ處の法である」と。茲て斯く「人生は無常の世である、夢の世である」と、唯夢無常と諦める丈けては、まだ眞に佛を頂いたものでは無いのである。佛更に仰せらるゝには、如來の色身は滅すと雖、法身は滅せず、如來は常住にして變易有ること無し。

汝は我が此の肉身丈けを見て、佛を見る事を知らぬ故我が此の假りの五蘊和合の身が、四大空に歸するを見て、我が亡くなると悲むのであるが、然うては無い。今我が滅ぶは、人生八十年の寶算つき、此の世に來た吾が體は亡くなるのである。法身は滅びる事は無い、之より彌々眞の佛の境に歸り、一如

法界の都に在りて、永劫に汝の身を照し、飽く迄汝が我と同じく生死を解脱する迄導く如來である。佛の身は今既提河畔で亡くなるも、如來は常住にして變易有ることなく、此の人生の生滅が已るなり、無始無終の一如法性の境にありて、常に法を説き導く如來故、汝等歎くこと勿れ」と懇々と説き下されたが佛『涅槃經』の説法にて、又常に申す阿闍世王が他力信仰に入られたのが、此『涅槃經』の説法なのであります。

六

是さて御同様 陛下御一代の御恩徳、先帝陛下が御代を終えさせ給ふ迄の廣大の御恩に對し奉り、今は此の大正の御代に於て、眞實自覺の上より御報謝させていたゞかなければならぬのであります。其の然う出来る精神の源力の源は何處であるか。我々 明治天皇は世を去り給ひたと徒らに泣き悲んで居るでは無い。陛下のお姿は世を去り給ひ、玉體は桃山に隠れさせ給ふたのであります。其の、あなたの御精神を頂き奉れば、南無阿彌陀佛々々と、念佛稱へさせて頂く毎に、直き／＼其の廣大なる思召しを感じ、寧ろ非常なる力強さを覺えさせて頂く事が出来るのである。其の斯く面の當り直き／＼御照覽を蒙る事を得るは、一に此の信仰上より出て来る味ひ故、此の際一方人生の當てにならぬ事を極力知らせて貰ふと共に、其の裏に此の永久不變の廣大の思召しをします事を、知らせて貰ふことが、實に肝腎である。恐らくば此の大正の大御代に於て、新なる力の源となりて現はれる處のものは、此の廣大の味ひにて、此の味ひの上より言ひてこそ、初めて、先帝陛下に仕へまつる事が 今上陛下に

仕へまつる事になる、といふ事も言はるゝのである。故に其の根本の源を、平素我々の頂く信仰上より明に知らせて頂く事が今の時に於て實に肝要であると思ふ事でありませう。斯く申せば、常に申して居る處と、變りはないのであります。今日は一面佛入涅槃の時に、五天竺の人間が擧げて天地に慟哭したと同じ歎きに、日本全國の人間が皆な沈んで居る。其の歎きの者に佛は如何なる事を聞かせ、如何なる事を知らせて下されたのであるか。實に今言ふ『涅槃經』の『如來の色身は滅すと雖、法身は滅せず、如來は常住にして變易あること無し』といふ言葉であります。之を『歎異鈔』で申すならば、

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたわごととまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはします。

の御示してある。之れが世の中は當てにならぬ、唯念佛ばかりであると、世の中を捨て切つて仕舞うての御念佛で無い。此の念佛の廣大なる事を頂かせ貰うた上からは、此の心淋しき中からも、此の念佛をしませばこそ、先帝陛下の御遺靈にも遇ひ奉ることが出来るのである。此の念佛を頂ければこそ、佛の眞の御まことの上より、吾人の日常生活を始め、陛下の思召しを行はせて頂く事も出来るのであると思ひ、之より之を話させて頂き度いと思ふ事でありませう。

七

處て甚だ慚愧の事でありませう、此の御中陰中に一度『涅槃經』を通讀させて頂き度く考へつゝ、此處彼處讀む位の事

にて、充分拜讀する事も致さず、耻ぢ入る次第であります。去りながら、此の『涅槃經』の御教化は、今言ふ處が、もてある。處て余言ふ『歎異鈔』の九章であります。之れが疾うから然う思ふて居たのであります。丁度此の『涅槃經』の御教化に當るのであります。御存知の如く『教行信證』信卷に、此の『涅槃經』により、阿闍世王入信の事を説き下さらうとする處に、有難い親鸞聖人の言葉がある。

誠に知んぬ。悲しい哉愚禿、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、耻づ可し、傷む可し。

といふ御文である。之が丁度九章の

念佛まうしさふらへども、踊躍歡喜のこゝろあるをかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまいりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらやふらん。

とある御言葉に當るのである。全く「定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず」といふ歎きと同様であります。猶ほ又此の阿闍世王入信の『涅槃經』の文の終りの處には、能く言ふ御言葉であります。

善男子我が言ふ所の如し。阿闍世王の爲めに涅槃に入らず。

(中略)阿闍世とは即ち是れ煩惱を具足せる者なり。云云。即ち阿闍世とは未來の煩惱を具足せる者の事である。我れ其の阿闍世の爲めに法を説き、涅槃に入らぬと示し下されたは、即ち九章で頂けば「佛かねてしらしめて煩惱具足の凡夫とおぼせられたることなれば……」とある御言葉である。

煩惱具足の阿闍世の如き者がある事を哀れみて、其の者を捨てぬ我が慈悲である、とのお知らせである。其の捨て下されぬは、此の世ばかりで無く、其の阿闍世王の爲めに涅槃に入らぬ。設ひ肉身は滅すとも、長く一如法界の境に止まりて、飽く迄其の者を捨てぬとの廣大の思召しである。故に

久遠劫よりいまだて流轉せる、苦惱の舊里はすてがたく、未だむされざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことに／＼煩惱の興盛にさふらふにこそ。なごりをしくおもへども、娑婆の縁つきて力なくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。

必ず法身の境に在りて、其の者を永劫に待ち受ける。其の永劫に待ち受け下さる如來常住のお光りは、一に此の當てにならぬ、煩惱具足の此の者を知り召し、其者が捨てられぬとの廣大のお心一つなれば、斯く段々頂き來ると、『歎異鈔』の九章の御教化と、『涅槃經』の説法とは、全く符節が合ふのであります。

八

そこで私共此の『歎異鈔』の九章は常に讀み、又『涅槃經』も常に讀ませて貰うて居るのであります。實に此の度びは此の人生に『涅槃經』の有様を眼前に見せて頂き、面の當り事實に讀ませて頂いたのである。夫れにつき只今は聊か御縁の『和讃』を頂かんと思ひ、添へ引きして八首の和讃を讀ませて貰うた事でありませう。茲の『和讃』のどれを頂いても、實に感じが深いのであります。

生死の苦海ほとりなし、ひさしく沈めるわれらをば、

彌陀弘誓の船のみぞ、のせてかならずわたしける。
此の人生の生死無常といふ事は、此の度びの如く、實に我々眼前の事實である。斯く言ふは何とやらん。聖壽萬々歳と祈ると矛盾するやうでありますけれども、此の聖壽萬々歳は實に信仰上より来る無量壽、信仰上より来る天下和順日月清明の味ひにて、唯此の人生となると、如何なる高位高官、如何なる金銀財福のち方でも、此の人生の生死無常を免れる事出来ぬといふのが、佛の示し下さる處の教へである。其の生死の苦海に久しく沈める我々、此の苦海に沈淪して出づる事能はざる我々が、何によりて此の生死を脱れ、何が永久の光りであるか。即ち「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、みなもつてそらごとたはごとまことある事無きに、唯念佛のみぞまことにておはします」とある。「彌陀弘誓の船のみぞ、のせてかならず渡しける」とある。明治の大御代は實に歴史に類ひなき御治世、禁裡にお出でになる時は、一天四海に並び無き御方にましまして、時至れば此の人生にお出でになる間は仕やうが無い。故に茲て斯く當てにならぬと、泣いて仕舞ふのは無い。茲に實に知らせて頂かなければならぬ處がある、といふのが日本に於ては聖德太子以來お示し下さる佛敎の教へてあります。

九

又次ぎの和讃を頂けば、
一切菩薩のたまはく、
無量劫をへめぐりて、
恩愛はなはだちがたく、
われら因地にありしとき、
萬善諸行を修せしかど、
生死はなはだつきがたし、

念佛三昧行じてぞ 罪障を滅し度脱せし。
實に我々人生の悲みの底を叩きての御示してあります。極端な御示しのやうなれど、佛道修行をなされし一切菩薩の仰せられたには、我等未だ佛を得ず、修行中に在りし時、無量劫の長の間、種々迷ひて萬善諸行を行じ生死を離れやうとしたけれど、恩愛甚だ難く、遂に生死を離るゝ事出来なかつた。實に此の際我々の腸にしみ渡るお示してあります。實に私共今年程、此の無常の御知せを蒙つた事は無つた。皆様に御存知の如く、夏季求道會の折には、石見の中村さんが亡くなられ、すると間も無く此の度びの 御崩御に遇ひ奉り、猶ほ私己人としては友人やら、友人の子供が急に亡くなるやら、其他種々の出来事にて、實に今年、頻々として、此の人生の當てにならぬ事をお知らせ蒙つた事である。して斯く彌々といふ場合になると、平素頂いて居る信仰は信仰なるも、實に人生の恩愛の斷ち難き事を感ずる事であります。斯く人生は恩愛斷ち難く、茲になると何人と雖、何とも仕やうが無い。唯念佛三昧行してぞ、罪障を滅し度脱せしとある。萬善諸行では恩愛は斷てぬ、生死は離れられぬ、唯念佛三昧の一つである、南無阿彌陀佛々々と、此の永劫變らぬ念佛是れ一つを頂かせ貰ふ事であると頂く事であります。即ち「煩惱具足の凡夫……唯念佛のみぞまことにておはします」とあります。又聖德太子は四十九年の御生涯が畢り、彌々御隠れにならうとする時、世間虚假、唯佛は眞と仰せられた。世間は假りの當てにならぬもの、唯佛のみ眞のまことの變らぬものである」と御自身の御遺言を仰せられた。私は言はゞ是れ

聖德太子の『涅槃經』であると頂いて居る事である。すれば何れより頂いても、人生の此の當てにならぬ、仕やう無き處を哀はれみ下さる廣大の御慈悲を頂くの外は無いと、思はせて頂く事であります。

一〇

先日も茲に御出で下さる方で、或る御婦人の方が、甚だ失禮ながら未だ御安心の事が何うかと思ひ、お尋ねした處が非常に御安心の様子故、何うお頂きなされたかと尋ねした。其の方は先年夫を失はれ、それで茲へ御來聴下さるのであります。從來餘り眞宗には御縁の無つた方故、私も從來は充分、申さず居たのであります。處が言はるゝには、其の方も初めは佛がましますならば、もつと人生上善く仕て下され、夫が死ぬなどの事無さうなものである、と皆んなの喜ばるゝを不思議に聞いて居たのであるが、或る時此の世が斯く當てにならぬものだから、夫れが哀れとの御慈悲であると聞かせて貰ふた處が、俄に目の醒めたやうに、「此の當てにならぬ處が哀れと言つて下さるのであるか、此の仕様の無い處が、夫れが可哀相との慈悲にましますか」と、ふと心が樂になり、今迄人を不足に思ひ當てにしてたのが馬鹿々々しい、今迄何んて人を當てにして居たかと、夫れより殆んど無神經になつたかと思はるゝ程になつたとの話でありました。實に我々は如何に心を廻すも、致し方無き當てにならぬ世の中である、何程人に訴へて見ても、誰も相手に仕て呉れず、誰も心を知つて呉るゝ者無き闇みの世の中なのである。其の闇みの世の中に、其の當てにならぬ寄る邊の無いのが哀はれてあ

ると、佛かねて知召して煩惱具足の凡夫と仰せ下されたといふは茲である。其の煩惱の止まぬ、其の喜べ無い、其の名残惜しい、其の頼みの無い此の心を御覽下されて、「汝等歎く勿れ、世の中は皆な斯く當てにならぬ處で有るぞ、其の故に如來は常住にして變易あること無し、設ひ肉身は亡ぶとも、永劫に汝を哀れむにより、汝等歎くに當らぬ」とお示し下されたのである。實に斯く『涅槃經』は阿難が泣き悲むのに對して豫て言つて置くては無いが、諸行は無常である、是れ生滅の法である。色は香へど散りぬるを、我が世誰を常ならん」と是の故に之れを哀みて如來常住の光りがあるのであるぞ」とお知らせ下されたのであります。

一一

處が茲て妙な考を起し、斯く世の中は當てにならぬ、だから覺悟仕なくてはならぬとなると、安心は來ぬのであります。佛は何うかと言ふに、斯く當てにならぬ世の中に、當てにならぬと汝が泣き悲むも、天地に慟哭するも、實に最もであるが如何程悲むも此世は善くならぬ。其の善くならぬ處に苦しむ汝の其の心が可哀相である、其の心が不便であると、飽く迄此の心を知し召し、此の者に遣る漸無き思召しを持ちて、廣大なる境界より現はれ下されたが佛なのである。如來とは一如法界の境界より現はれ下されたが故に如來であり、如よりに來生して下さるゝ故に如來である。我々が此の仕て見やう無き有様を哀み思召し、迷ひの覺めたる佛境界より來生して、此の者を救ひ助けて下さるが佛のお姿なのであります。『和讃』には

十方三世の無量慧、
二智圓滿道平等、
十方三世の無量の佛は、同じく皆な此の一如から現はれて下さるのである。各別々の處から現はれ下さるので無い。此の人生の惱みの者を救はん爲に、同じく皆な此の一如界より現はれ下されたのである。そして「二智圓滿道平等」――

二智とは實智權智である。佛の眞の實智と方便の權智、此の權實二智圓滿道平等にして、我々一人々々の心に從ひ、其者の性情境遇に應じて、縁の有る所より隨意自在に化益して下さるが、三世十方の諸佛のお姿なのであります。而して其一如界より現はれて斯く化益し下さる諸佛のお心、現に近くば釋尊此の境より此の界に現はれて導き下さる其の御本意は何處にあるか。其の諸佛化益の彌々々の御眞意は何處に在るかといふに『略文類』には、

三世の諸如來出世の正しき本意は、唯阿彌陀不可思議願を説かんとなり。云々。

種々にお導き下さる諸佛の御意は、別々に有るので無い。諸佛各、色々の方面より、或は觀音と現はれ、勢至と示し、衆生の機縁に應じ、様々の御縁を結んで下さるのであるが、其の結局は、此の罪業深重の助からぬ者を助けるとの大悲の仰せ一つをお知らせ下さるのである。先きより言ふ如く、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界故當てにならぬ、其當てにならぬ者を見捨てぬとの大悲を起し、生死海中に迷うて居る此の罪深い私を助けるのお救ひが、念佛三昧の彌陀のお誓ひ故、十方三世の諸佛菩薩數多く居ます事なれども、之等諸佛の眞

實の思召しは「唯阿彌陀不可思議願をとかんとなり」――阿彌陀佛が四十八願をお發し下され、我々衆生を念佛三昧を以て助けるのお心をお知らせ下さる他は無いのである。『御文』の中には

一切の神明とまうすは、本地は佛菩薩の變化にてましませども、この界の衆生をみるに、佛菩薩にはすこしちかづきにくく、おもふあひだ、神明の方便にかりに神とあらはれて、衆生に縁をむすび、そのちからをもてたよりとして、つるに佛法にすゝめいれんがためなり。これすなはち和光同塵は結縁のはじめ、八相成道は利物のをはりといへるはこのころなり。云々。

有りとする神明も、此の思召し一つより現はれ、其の方面よりの御縁を以て、我々に此の佛のお意を知らせて下さる他は無いと知らせて下さるのであります。又此の次ぎの『和讃』には

彌陀の淨土に歸しぬれば、すなはち諸佛に歸するなり、一心をもちて一佛を、ほむるは無碍人をほむるなり。

これは曇鸞大師の『讚阿彌陀佛偈』によりお作りの『和讃』でありますも、其の源は『華嚴經』に在る。『華嚴經』の御言葉に、十方無碍人一道より生死を出てたまへり。一道は一無碍道なり。無碍は曰く、生死即ちこれ涅槃なりと知るなり。

十方三世の諸佛菩薩は皆な一道より生死を出て給ひた、一道とは一無碍道である。無碍とは生死即涅槃と知るなりとは、『正信偈』に

惑染の凡夫信心を發しぬれば、生死即ち涅槃なりと證知せ

しむ。

と。生死即涅槃とは、生死即ち涅槃であると、悟るのでは無い。斯く生死の當てにならぬ仕様の無い處を阿彌陀佛遣る瀬無く思召し下されて、汝等歎くこと勿れと廣大の大悲の塊りて御成就下された南無阿彌陀佛。して此の南無阿彌陀佛は其の者を見捨てぬ心なるぞと、茲を頂かせて貰ふことである。『和讃』には

彌陀の廻向成就して、往相還相のふたつなり、

これらの廻向によりてこそ、心行ともにえしむなれ。

此の生死の巷に生死を見捨て、下さらぬ處の、此のお慈悲一つを頂かせて貰ひた味ひである。『和讃』には又

本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、

煩惱菩提體無二と、すみやかにとくさとらしむ。

と。實に茲の味ひである。他力信仰の極意は茲に在るのであります。

一二

色々思ひ出す事多いのでありますが、此の學舎の前の持主なる島田善根翁は常に言はれた。『涅槃經』は佛の御遺言である。子として親の遺言を守らぬは孝で無い。佛弟子として佛の遺言を頂かぬは、佛を無にするのである。故に宗旨の如何を問はず、『涅槃經』は必ず讀む可しといふ事を言はれた。又嘗て深草の元政上人が、『涅槃經』の事を書かれたる『如來秘藏錄』といふ本を見せて頂いた事もあるのであります。又先きより言ふ親鸞聖人の『教行信證』でも、三經七祖以外は、『涅槃經』を最も多く引いてお出でになる。殊に先きより言ふ『信

卷』の阿闍世王入信の處、最も多いのであります。斯く我々

御崩御の時に當り、佛の御遺言たる『涅槃經』のお心を頂く事、最も有り難い事であると、頂く事でありす。其の『涅槃經』の涅槃といふのが、今言ふ如くて、生死即涅槃であると悟れと言はれて、悟れるので無い。我々は「恩愛甚だたがたく、生死はなはだつさがたして、夫れは何程言はれても、出來ぬ事なのである。色々言ひますけれども、先達て私の友人の子供が一時に三人迄急病に罹り、長男の小供は遂に亡くなつて仕舞うた。すると間もなく母御の方迄病氣にかゝられ、私は實に氣の毒である、心底より同情していると、忽ち私の小供が四十一度の熱を出し、私は例の大あわてをして、周囲の者も誰れも彼れも、殆んど呆れる程にうろたえた。實は兼て聞かせて貰うて居るもの故、充分覺悟をさめた上で、よけ悲しみが現はれる。幸に直ぐ快くなり數日間て済んだのでありますも、斯る小事でさへ之れ程に思ふのである。今の友人などは、三人の小供が一邊に病氣になり、一人は亡くなつて仕舞つたのである。斯る小事で申すは、申すも實に恐懼の極みながら、陛下の御心中如何斗りかと、恐察し奉る事でありす。實は然う思ひ參らすも、苦しさ事ながら、中々骨肉の御間柄、御身柄の哀別離苦の一段に至りては、如何計り御心を惱ませ給ひし御事と、此の點思へば思ふ程、愚痴が出て悲しみに堪えぬ事でありす。其の上に又乃木大將の今度の如き事があり、實は唯てさへも堪え難き折柄に、彌々悲しみの底をえぐられたる事にて、畏れながら、皇太后陛下の御心中拜察し奉る事でありす。茲になると、之を生死即涅槃と悟れと言は

れたつて駄目である。茲に於てか、親鸞聖人は『涅槃經』の御示しを、他力信仰を以てお説き下され「佛かねてしろしめして、煩惱長足の凡天と仰せられたることなれば云々。」「見よ來の通り當てにならぬ人生なるぞ、其の人生を見捨てぬ我がまことであるぞ」との仰せてあると、お示し下さるのであります。

一三

初めにも申した 先帝陛下 御踐祚の御勅語には、「天下億兆一人も其の處を得ざるときは、皆な朕が罪なれば云々。」此世の 陛下の思召しは、天下萬民、一人にても其の處を得ぬ時は、是れ朕が罪であると仰せ下さるのである。處が最前矢張り佛間で拜誦した『和讃』には

智度論にのたまはく、 如來は無上法皇なり、

菩薩は法身としたまひて、 尊重すべきは世尊なり。

三世十方諸佛、ありとある菩薩が無上法皇と尊重なさるゝ阿彌陀佛のお慈悲は、丁度 陛下が斯く仰せ下さると同じく、十方法界に罪惡の爲め生死海に沈み果つる者ある時は、正覺は取らぬ、佛とは言はれぬと、遂に五劫永劫の長き間我々の爲めに御修行なしたされた佛にてましますのである。佛の遣る瀬無き御仰せは、『歎異鈔』にて頂けば、

善人なほもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。云云。

其の汝の煩惱の有るのが可哀相である、罪の深いのが見て居られぬのである、生死を免るゝ事出來ぬのが、哀はれて仕やうが無いのであると、呼びかけて下されたのである。我々が生死即涅槃と悟れる位なら、佛は本願をお發し下され無くて

もよい。自分で立派な事が出来る程なら、監獄の囚人の特赦減刑の恩典を下さる事は無いのである。實に此度びは 陛下は罪囚の上に、貴き恩赦の 御詔書を下され、私は殊に有難く頂かせて貰つて居る事でありすが、

朕遠に大故に遭ひ哀れ已まず、前典を釋ねて惠澤を遠邇に洽からしめ、以て朕が罔極の哀を申べんことを念ひ、特に有司に命じて恩赦を行はんとす。百僚有衆其朕が意を體せよ。

哀れは逆に讀むと、即ち於哀である。佛のお慈悲をお示し下さる場合に能く用ゐらるゝ文字である。其の哀れみの情が已まぬにより、惠澤を遠き近きに洽ねく行き渡らしめ、以て罔極——罔極は極りなき悲みである。其の罔極の悲みの情を漸く之を以て申べやうと思ふ。畏れ多き事なれども、大故に遇ひ、哀みの情已み難きによつて有司に命じて、殊に世の哀れなる者に恩澤を施し、此の悲しみの心を申べやうと思ふ、と宣ひ下されたのである。實に今迄特赦減刑の恩典はあるが、斯くの如き貴き思召しより、殊に罪ある者を目當てとして、下し賜りた事は無き事故、拳々服膺して思召しの程を頂かなければならぬ事と思ふ事でありすが、而して之が何か、陛下が 大故の事に御遇ひなされ、哀れ已み難き憐愍の思召しより、世の弱き者罪ある者、乏しき者、夫れ等の者が殊に不便であると大悲の思ひ遣る瀬無き思召し、斯く恩典として賜はりたるあなたの勅命なのである。『行卷』には、

歸命といふは本願招喚の勅命也。

「其の生死の海に惱んで居る、其の煩惱具足の者が殊に哀は

れてある、我其の爲めに持ち受ける」とは、實に是れ法師法王の勅命なのである。大聖釋尊出世の御本意、選擇本願の御正意は、實に此の廣大の思召しより外は無いのである。法然聖人は宮中に召され選擇本願をお説きなされた時、源空如き下賤の身なれども、勅命とあれば、宮中迄も行けると仰せられた。實に我々も此の遣る瀬無き御仰せなればこそ、此の罪惡深重の身が、浮かませて貰へる事と、頂かせ貰ふ事でありすが。

一四

殊に思はせて頂く事は、先きにも申した如く、釋尊涅槃に入り、彌々此の世を去り給ふとするに臨み、御心に懸けさせられたは、阿難でも迦葉でも、又五天竺の國王の上でも無つた。最も罪深く、佛に逆ひ五逆十惡の大罪を犯したる阿闍世、提婆の身をお召し下されたのである。佛は涅槃に入り給ふに臨み、他の事は何も仰せられ無つた。唯阿闍世とは煩惱を具足したる者である、我阿闍世の爲めに涅槃に入らぬと、お示し下されたのであります。親鸞聖人は之を『歎異鈔』にお示し下されて、先きより言ふ如く「佛かねて知召して煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、云云」と。甚だ恐れ多き事ながら、先帝陛下も恐らくも隠れに隠し、日頃常に萬民の上に御心をかけ下されし事故、恰も親が亡くなるに臨み、小供を氣に懸るが如く、我々の上を思召し下されし事と恐察し奉る事でありすが。又茲ははつきり話を分け、單に人生上わけとすれば、乃木大將如きも何か深く感ぜられた處があつたのかも知れぬ。動もすれば我々一人々々の上を御心配下されての事かとも推察さるゝ事でありすが。が之は人生方面丈けて申

すのである。我々佛の廣大の思召しより頂くと、我々が淺聞しきばかりに、其の者を見捨てぬ、其の者が殊に哀れてある、其の者に此の我が心を屈けて、心を翻るがえさしめん、との廣大の思召しの表はれと頂く事でありすが。で先き程の『和讃』に、「本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、云々。」此の「逆惡攝すと信知して」の一句が茲の處で實に肝腎である。眞面目に言ひて「爾らば我々斯く廣大なる 大恩を蒙りて眞に御報謝が出来るか」といふに、私の心は實は五逆十惡の罪を恐れぬ仕て見やう無き申譯の無い奴なのである。若しお慈悲が無ければ、乃木大將のせられた事も最とも言はなければならぬ程の申譯の無い奴なのである。其の奴が其處を通らせて貰へるのが何か。實に此の「逆惡攝すと信知して」の一句で通らせて貰へるのであります。實に私の惡しさを程を言へば、何程でも言へるのである。實に我々は、御恩知らずの怠け者、横着者、傲慢者なのである。現に此度びのやうな事があつても、驚きを立てる事を知らぬ仕て見やうの無き奴なのであります。然るに此の奴が可哀相である哀はれてある、其の奴が一人にても助からぬとあると、正覺を取らぬ。——若し汝が地獄に行くなら、我も共に地獄に行くこと迄、阿闍世王にはお示し下されたのである。實に此の思召しより、阿彌陀佛の本願は來り、釋尊は娑婆往來八千度び仕て下され、殊に亡くなる時迄、未來の阿闍世王の爲め涅槃に入らぬとお説き下されたのである。又陛下は、態々恩赦の 詔書を下し玉はり「朕此の度びの大故に遇ひ、殊に罪深き者を哀れに思ひ、其の者に惠澤を施して、罔極の悲しみを申べやうと思ふ。夫れ等の者に此

の我が心が届いて、心を翻し哭るゝならば、我が此の哀みの心が慰まるゝと仰せ下されたのである。我々の心の悪しきを御心配下されて、其の者に哀れみを施し、御心の届くを以てあなたの慰めとして下さると御仰せ下されたのである。茲はくどきやうなれど實に有難き處であります。偕て斯く私が悪しきばかりに、私が仕てやう無きばかりに、初めより夫れを御承知下され、其の爲めの長々の御苦勞であつたか。私が今斯く生死無常につき當り悩んで居る、其の事をかねてより見て取り下され、其の爲めに態々御苦勞下されて、其の親ある事を長々知らせ下されたのであつたかと頂けば、如何な五逆十惡の私も、其の御大悲の前に謝り果て、如何な罪極深重の心の塊も、其の真心の爲めに融かされ、南無阿彌陀佛々々と頂かざるを得ぬ。茲が實に『歎異鈔』に「佛かねて知召して煩惱具足の凡夫と仰せられたる事なれば」と仰られ、又『正信偈』に「惑染の凡夫信心を發しぬれば、玉死即ち涅槃なり」と證知せしむ」とお示し下され、又

能く一念喜愛の心を發しぬれば、煩惱を斷ぜずして涅槃を得

とある味ひであります。

一五

さて斯く段々信仰上より頂き來る時は、四十七年間大業を御成就下されたる明治陛下の思召しは、結局は此の廣大なるお光り一つを御知らせ下さる御苦勞と、頂き奉る事でありま

す。爾るに此の尊き 御治世の下に遇ひながら、此の眞の思召を頂かずに居る我々は、實に獅子心中の虫である。而も其

ると親鸞聖人は御臨末の御書に

我歳きはまりて安養淨土に還歸すと雖、和歌の浦の片男浪のよせかけ／＼かへらんに同じ。一人居て喜はゞ二人と思ふべし。二人居て喜はゞ三人と思ふ可し。其の一人は親鸞なり。

我なくと法はつきまじ和歌の浦

青草びとのあらんかぎり。

聖人は信仰上より斯く仰せ下されたのである。我々お慈悲を喜ばせて頂く者は、同様に南無阿彌陀佛々々と頂かせ貰ふ毎に、直き／＼陛下の御遺靈に遇ひ奉り、御照覽を仰ぎて日暮しさせて頂く事が出来るのであります。斯くして各自が御照覽を仰ぎ／＼、朝家の御爲め國民の爲め、念佛して 今上陛下にお仕へする事、是れ彌陀の本願にすれば、攝取不捨の光益の中に日送りさせて頂くと同様にて、さゝやかなる我等なれども、信仰上より斯くさせて頂くを、哀れと陛下も御照覽下さる事と、頂き奉る事であります。己上（九月十五日 明治天皇七七忌の日）

武士道三百則

足立栗園氏編

本書は史學に實名のある足立栗園氏が、山鹿語録、武者物語、盛正記、名臣言行錄等の諸書により、戦國時代より徳川前期に亘り、名將勇士の美談嘉行二百五十餘項を収録して、當代武士道の面影を示されたものである。記述餘りに簡に過ぎ、折角の内容に對し、聊か惜しき憾みはあるも、乃木大将の武士道の最後に勵まされ、斯道研究に志ある人士には、鑑に一讀の必要ある著作である事を信するものである。殊に成る可く人目に新しき新事實と努められたる點は、著者の注意を多とするのである。（發行所淺草區橋場王子出版社、定價金五十錢）

の淺間しき奴の爲めに、殊に 大御心を惱まし給はりたかと頂けば、唯々廣大の御思召しに、感謝の外無い事であります。茲に於てか明治の大御代に於て、形の上にて海外迄日本の光りの現はれた如く、此の貴き 陛下の御精神の光が、此の大正の大御代、今上陛下の御治下の於て、必ず四海を照し給ふ事、間違ひ無き事と頂かせ貰ふ事である。茲を頂く、明治天皇陛下は、確に如より來生して、今迄長々國民を御手引き下されたものである。今又別れ奉つたといふは、實に佛涅槃を現じて、諸行は無常である、是れ生滅の法であるとお知らせ下されたと同じく、明治の御代に於ては、國民は精神的自覺の域に迄到らなかつたのであります。其の間不知不識の間に漸次御導き下され、最後に信仰一つを頂くのである。と、一如に御歸り下された事と頂かせ貰ふ事である。實に此度び 御崩御の御示しは、國民上下哀悼の極、此南無阿彌陀佛を頂けよとの、御思召しであると頂かせ貰ふ事である。日清日露の二大戦役をへて來た國民は、今度こそ彌々此のお慈悲一つを頂かせて貰はねばならぬ事と頂く事であります。すれば先帝陛下は最早や隠れさせ給ひたと決して力を落す可きては無い。今は一如の一切化益の境に歸りて明に廣大なるお光りと共に、我々の爲る事なす事を見そなはし下されてあるのである。其のお歸りなされたる佛境界は、我々と幽冥界を異にするも、南無阿彌陀佛々々と頂かせ貰ふ時は、我々直き／＼陛下に遇ひ奉り、直き／＼御心の程を頂き奉る事を得るのである。又御縁來りて彌々其の境に到らせて貰つた節は、直き／＼龍顏に咫尺させて頂けるのであります。茲にな

時

報

隨處隨緣

○本年は御大喪のために全く夏季傳道を廢して、かねての約束に背きたりしが、學舎に於てつゝしみて奉悼會を修し、特に日曜は、いつも中陰還夜に當りたりし爲め、いつも勤行と共にし講話を開きて法縁を結び、九月十五日七々日奉葬の講話を爲し、奉悼哀婉の間に第一期喪を終りたれば、九月三十日東京出立、鎌倉に立寄り、十月一日江州自坊に於て奉悼會を営み、江州各地の傳道をなし、三日初めて河瀬法藏寺那須凌俗君方、四日年々必ず有縁なる吉田村正法寺吉田龍誓方、五日野在鎌掛に傳道し、七日より三晝夜自坊の報恩講を執行せり。門徒并に村内老若機縁純熟して開法入信のもの多し。又隣村隣寺及親戚に法縁を結び、丁野惠深君の寺に傳道し、十三日朝京都に着し、十三日及十六の三日布教講習會に於て、眞俗二諦の交渉につきて講話したり。恰も此時伏見桃山御陵に参拜し、翌日 皇太后陛下の御参拜を奉送し來る。不可思議の宿縁仰ぐべし。

○十月十九日土曜講話に兼ねるに、翌日の學舎講話を以てし、其夜出立仙臺講習會に赴く。二十日は道交會秋季大會を西別院に開き、其夜道交會に泊し、二十一日より二十五日まで大谷派教務所主催の下に、秋季講習會開催せらる。講本は歎異鈔朝と夜は法話演說會なり。大河内秀雄師亦加はらる。澤柳東北大學總長、三好高等學校長、杉谷同教授、常盤文學士、奥宮檢事正、早川前市長等亦助けらる。明治三十二年來有縁の地、今や再び信仰勃興の氣運に騰る。又幸に常盤兄の報恩講

を修せらるゝに遇ひ、之に參詣し、其御同行に法縁を結ぶを得たり。感謝何ぞ堪へむ。

○十一月十五日千葉教院の報恩講に參詣して法縁を結ぶ。多田兄已來年々有縁の營なり。今や華野君亦た後を襲ぎて傳道せらる。宿縁尤も喜ぶべし。同月十八日より廿一日迄若松求道會の講習會を開かる。講本は正信偈なり。同地は過去七年間年々有縁の地、今や正に純熟して昨年已來入信者頗る多し。毎夜信仰談話會を開く。最終の夜報恩講を修す。同地に於て聖人直筆の十字名號あり、年々求道會々場に於て拜禮せしめらる、今年は本尊として報恩講を修するに至る。是皆同地に教誨師たりし原卓一兄の佛種を播けるの地、漸く信仰の收獲の時到来りと謂ふべし。廿二日歸路郡山在開成山桑野村に於て、先帝陛下奉悼會を營まる。乃ち此に法種を蒔くを得たり。是れ明治五年維新當時東北、北海道開拓の先驅として試みられたるの地、再度御行幸を得たりといふ。此の如き有縁の地に於ける奉悼會に出て聖德を奉讃するを得たり。行在所、大神宮等、一草一木踐む所の地皆當時の御苦勞を偲ばしむ。夜郡山修養會に於て信仰の實験につきて話すを得たり。結縁空しからず、朝家の御爲め、國民の爲め、且は、各自信仰の爲め御念佛あれかしと念じ奉る所なり。

○十一月二十五日求道學舍御同朋の報恩講を修す。昨年已來特に企てし所、講話の間に特に佛壇を假設し、満堂の御同朋と共に勤行し、後に歎異鈔を輪次に拜讀す。一文一句の結縁空しからず、坐ろに聖人の影向を仰ぎ奉る。講話の後、小豆粥を共にいたゞき、信仰談話會を開き、午後に至るまで法縁を仰ぐを得たり。二十六日出立二十七日京都本願報恩講に參詣し奉るを得たり。同夜大谷大學御通夜に加はりて法縁を結び、翌朝後大谷の祖廟に跪き、つゞきて本山結願に參詣し聖人の眞影を尋拜し奉り、親しく善知識の德音に接す。如來大悲の

恩德は身を粉にしても報すべし、師主知識の恩德は、ほねをくだきても謝すべし。同夜江州に歸り翌日內佛報恩講を修す。時恰も秋收の時、人皆法縁を缺くを恐る。恰も天雪りて心を安んじて勤行し、且つ聖人の御苦勞を偲ぶ。母上亦深く満足したまふ。夜半出立歸途に就く。翌土曜講話のためなり。十二月一日夜求道學舍學生并に出身者の報恩講を修す。晩餐を共にし、勤行を爲し、御傳鈔を拜讀す。武田兄下巻を上げらる。御在世を偲び奉ること限りなし。三日午前九時より有志御同朋合併して家庭の總報恩講を修せらる。共に勤行の後報恩講式文并に歎異文を拜讀す。講話の後、共に晝餐の供養を受く。午後共に法味愛樂す。此日朝來松本雪城君加はられ、後には稻葉道意君來らる。終日團樂法惠に沿す。本年は何の幸ぞ學舍に於て三度報恩講を營み、自坊并に内佛の報恩講は勿論、特に本願の報恩講に參詣し奉るを得たり。回憶す、滿十年前わが歸朝の年、兩親本山報恩講に、參詣の時予歸郷、家を守りて歎異鈔第二章を深く感じて、親鸞聖人の信仰なる一文を草す。「信仰問題」の中頃に收めたり。父上之を讀み大に賞せらる。誌上に掲載するに及び、先づ再從弟忽ち謝意を表し。來る、而して兩者今や亡し矣。南無阿彌陀佛。

諒闇中につき歳末
年始欠禮仕り候也

近角常觀

眞宗十派管長諸大德及碩學大家百五十名御賛助

會長文學博士 前田慧雲 師
編輯 長妻直良 師

眞宗全書

洋裝菊判裝訂
麻布意匠優美
五號活字一冊
五百頁每月二冊宛刊行

豫約規定●大正二年一月十日より毎月二冊宛刊行同三年十二月四十八冊に滿るを以て第一期刊行を終る●豫約者は配本を受ると同時に金貳圓五拾錢と郵送の實費を支拂するものとす●配本は引換小包郵便に依る●豫約申込は十一月十五日迄とす●明治年間空前の大出版たる正續二刷の大藏經を刊行したる弊院は更に進んで日本佛教界の巨宗たる眞宗全書の刊行に從事せんとす●註疏、史傳、論難、唱導、目錄の五大部門の下にあらゆる希觀と必須との典籍を網羅せり、若し價格を以て算すればこの一冊に收むる所は和裝二十四冊(一冊五十枚)に當り、四十八冊は一千冊以上の和本の所有すると齊し、假に低廉の筆工(一枚三錢)に托すとせば約一千六百圓を算するに至るべし、是の如き貴重典籍を極めて安價に購求し得るは正に是の機に在り、希くは續々豫約御加盟あれ(刊行書目は郵券貳錢封入御申込あれば贈呈す)

各宗管長猥下十一名序文 會長文學博士前田慧雲師 原編主任中野達慧師編纂

大日本續藏經 完結

大日本續藏經は一千數百年間印度支那の大德碩學が佛教に關する九百五十餘人の傑作一千七百五十六部七千一百四十四卷の著述を十門六十三類に分ち大凡そ十五萬七千頁に縮刷したる古今叢書の巨璧にして東洋宗教文學の寶庫なり●正續大藏經(再版)全部三十六套三百四十七冊正價金四百圓也現下少數の殘部を限り一時金參百參拾五圓月賦拂金參百六拾圓也規定書見本附御入用の方は郵券貳錢封入御申込あれ

發行所 株式會社 藏經書院 京都 市 油 小路 通 松 原 上

電話 二七六番 三三六番 東京 口 京 三番

文學博士	南條文雄	師校
文學士故	藤井宣正	師著
東洋大學教授	島地大等	師補

畫 插

木版彩色刷、石版彩色刷、コロタイプ版一頁大及び二頁大十八枚

佛
教
辭
林

脊皮製菊判
天金全十冊
內容見本進呈

▲特價金參圓六拾錢
(定價金四圓五十錢) 小包料金拾六錢

専門宗教家必須の寶典たると共に一般讀書家に最も適當なるは本辭林の特色なり
採録の**佛教三門文書并に普通に行はるゝ諸種の佛典中に求め、謠曲院本の類を**
も逸**排**列の法又斬新にして一語を理解する**解釋**は専ら明快懇切を主とし補ふに古雅新珍の多數**挿畫**を以て**佛書**を解し**佛蹟寺院**
せず**排**列と共に廣く其語の活用を知らしめ**解釋**補ふに古雅新珍の多數**挿畫**す且つ**佛書**題し**佛蹟寺院**
名勝を叙し**佛教界の偉人**を記傳する**佛教百家全集**の觀あり、管に専門佛教家に止まらず、日本の文學
の須らく座右に備ふべき大著也

●發行所 東京神田錦町一丁目十番地
(長電話本局二四三八)
振替 東京四九九一

明治書院

近角常觀編著書目

親鸞聖人の信仰

參 版
定價 七十錢
郵稅 八錢
綴

信仰之餘瀝要略

三
定價
五錢
三冊
施稅
本用

冠頭
唯唯
信
鈔信
文
意鈔

初版
定價七錢
郵稅二冊迄二錢
施本用

施●本●用●小●冊●子●は●部●數●に●應●じ●充●分●割●引●す●

近角常觀序 鈴木龍司著

入信之徑路

定 價
卅 四
錢 錢

求道昨年度分合本

定價七十五錢
郵稅八錢

申
込
所

東京市本郷區森川町一
振替東京一六六九六番

求道發行所

規定

本誌は毎月一回二十日發行とす
本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、
郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川
町郵便局」宛の事
郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一番地求道發
行所」とせらるべし
本誌の講讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべ
く、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
本誌定價左の如し

一	部	一	ヶ月	六	ヶ月	一	年	郵税一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘				
●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢								

大正元年十二月二十日印刷
大正元年十二月廿四日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力

發行

所 求 道 發 行 所

(振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所

東京市神田區表神保町
所東東京堂

前號要目

求道

◎眞俗二諦の交渉

◎信仰或問

講話

◎『教行信證』信卷三信釋

第二席

近角常觀

◎惡人正機

近角常觀

告白

◎殺されても止められぬ御念佛

峠しのぶ子

雜錄

◎慧信尼公の夢想ありし佐貫の

郷を訪ふの記

近角常觀